

十年に及んだ。徐渭の文は奇を以て勝る。茅坤は鹿門と號し唐宋の諸家を推崇した。『唐宋八大家文鈔』は坤の撰に係る。李贄の文は淫蕩である。好で奇説を立てた。

三、經義文 經義は即八股文で、その由來は、上に器小の君主があつて、妄りに天下の人才を籠絡せんとするがあり、下には人爵を希ひ、富貴を求むる舉子があつて、只管有司の意を迎合せんとするに因つて發した一種の俗文學である。即官吏登用試験の文で、時文と稱するものがこれである。

八股とは對偶の名で前に四股（破題・承題・起講・提比）後に四股（虛比・中比・後比・大結）を講ず。この經義行はれて古文は衰へた。考試は三年一回行ふのが例で、題を四書・五經に取り、舉子をして經を按じて對策せしめた。對策は勿論時文の法によるもので、破題・承題・原起・大結を以て章句を稱するのである。

【參考】李王七子とは李・王二氏の外、宗臣・謝榛・吳國倫・徐仲行・梁有譽の七人をいふ。

第三節 韻文界の概説

一、總説 國初の韻文界を概観すれば先驅には劉基があり中堅には高啓があり、羽翼となりしものには袁凱・楊基があり、後勁には張以寧・徐・賁張羽等があつて何れも盛名を馳せた。永樂以後に及んでは楊士奇を祖とする解縉一派の臺閣體が生じ、李何七子等の復古派も活躍した。又袁氏兄弟等の公安派、鍾惺一派の竟陵派、或は陳・高二氏等皆當時の詩壇を代表するに足るものであつた。

二、重なる詩人 劉基字は伯溫、詩は高啓と共に氣品頗高く、古詩をよくした。高啓字は季迪、青邱と號した。少にして孤となり力學して遂に名を成した。文武の才があり詩は李・杜と雄を争ふ程である。元來、辭華に纖巧の風があつたのを一洗して頗氣品を高くした。年四十に至らず連坐によつて死んだ。彼は實に「莫向瑤階吠人影、羊車半夜出深宮」の一句累をなして腰斬せられたのである。彼は楊基・張羽・徐賁等と共に四傑と稱せられた。著書に、文には『烏藻集』があり詞には『控舷集』がある。

袁凱は權譎にして才辯があつた。楊基には「眉庵集」十二卷の著がある。徐賁は詩法宕然として規律がある。彼は又畫に巧で就中山水に妙である。張羽は近體に長じてゐたが、唯頓挫を缺いた。臺閣體は太宗の永樂以後に起つたもので解縉・楊士奇等之を始め郭登・曾啓等之を次いだ一派の詩體で、初は典雅雍容の趣があつたが、後には一般に氣品と風致とを剝落して、天順・成化の際に至つては遂に墮落して又觀るに足るものがない。要するに太平詩人の態度たるを免れない。解縉字大紳、臺閣體の冠冕である。楊子奇と共に臺閣體を起した。之を繼いだものに郭・曾の二氏があつたことは前述の通である。李東陽字は賓之、茶陵と號した。臺閣體の起つてより三十四年後に起つて臺閣體の弊を矯正した。性風流弘長で、後進を奨成し、又才雋を推挽した。世人西涯先生といふ。李夢陽も曾て彼の門下であつた。夙に唐宋文格を學んで、文は秦漢のみを、詩は盛唐のみを基準とし、理想とした。何景明字は仲默、才は夢陽には及ばないが、妙悟は聊か深く、且創作の才がある。性耿介で、節義を尙

び、榮利を鄙み、國士の風がある。詩風は才情秀逸で、諧雅の音に富んで居た。名成つて後李夢陽と相分れた。李夢陽字は獻吉、性は傲岸で、同列を凌辱し又貴權をも侮慢する風がある。復古説を唱道して、専ら摹擬を事とした。初め何景明と俱にしが後分れた。詩は才力富健で雄邁の氣を負うたが剪裁甚だ至れるは缺點であつた。李何七子とは、李夢陽・何景明二氏の外、徐禎卿・辺貢・康海・三九思・王廷相の七人と言ふ。復古派とは李・王等の先驅をなした李何七子の一派と言ふのである。楊慎字用修、升庵と號した。彼は李・王七子の剽竊に反對した。公安派とは袁宗道・表宏道・袁中道兄弟等一派と言ふ。袁宏道字は無學、性靈を主とした。模擬釘印の弊を矯めんとして力足らず、鄙俚淺俗、諧體となる。彼が四湖の詩に「一日湖上行、一日湖上坐、一日湖上住、一日湖上臥」とあるなどは好適例である。竟陵派とは鐘惺・譚元春等の一派で、詩體を鐘譚體といふ。意義浮薄で、詞旨は晦蒙俚率、僻澁の弊がある。鐘惺字は伯敬、公安派の諧體を矯めんとして反つて難澁に

陥つた。陳子龍は作詩の技倆袁・鐘二子の上に出てゐる。李王七子の流派である。彼は明の社稷が覆滅した時、終に節に殉じた。高攀龍は淵明を學び、その神髓を得たるに近いものである。

第四節 小説戯曲及雜著

一、小説戯曲 傳奇小説は『剪燈夜話』等率ね正文の短篇である。

『西遊記』は作者不詳、全篇一百回。内容は唐僧玄奘三藏が西域に赴いて經を求むるの譚を假り、孫悟空・沙悟淨・猪八戒の三怪を以て之に配してある。文章は凡て俗語に依り卑近なる寓話の中に幽玄なる佛理を解釋したものであるが、頗奇怪なる物語である。

『金瓶梅』作者不詳、全篇一百回、内容は宋の巨商西門啓が淫樂蕩佚の話説で、水滸傳中の一二人を假りて一生面を開いた淫奔の書である。文章は凡て俗語を以て書した。

『牡丹亭還魂記』は湯元祖の作。内容は、杜麗娘・柳生の情事を脚色したもので、結構は怪誕荒唐を極めてゐる。然し、情の力を形化せんと試みた作である。我國の圓朝の講談『牡丹燈籠』は本書を雛案したものである。

湯元祖字は義仍又若士といふ。慷慨氣節の士で、傳奇・戯曲をよくした。『玉茗堂集』を著はした。又その著『玉茗堂四夢』は有名である。四夢とは『牡丹亭還魂記』『邯鄲夢』『南柯記』『紫釵』の四種である。

二、雜著 『萬姓統譜』百四十六卷は凌迪知の撰。上古より明の中葉迄の上帝王より下士庶に至る略傳を載せてある。四聲一百六韻によつて類編したる支那歴代の人名辭書である。『五車韻瑞』百六十卷、迪知の弟、凌稚隆の撰、經史子集賦の五に分ち韻にて引く成語字書である。稚隆は又『史記評林』を撰した。『三才圖繪』百六卷は王折の撰。三才とは天地人である。即、今の百科辭典の如きもので、凡て挿圖で示した。中には荒唐無稽に近いものもあるが、博物學の開けなかつた頃には相當便利

な本であつた。我國の寺島法橋は本書に、本邦の事項を添加して「倭漢三才圖繪」を撰した。王折は又外に「續文献通考」を撰した。「文献通考」(宋末参照)の續編である。「文體明辨」八十四卷、徐師曾撰、明の吳訥の文章辨體に據り、之を取捨して著したものである。分つて文章綱領一卷、詩文六十七卷、附録十六卷とした。體例や、燕雜の缺點はあるが概して整つてゐる。我邦にも寛文十三年の翻刻本があり頗世に行はれた。「續文章軌範」六卷は鄒守益撰、選擇宜しきを失してゐるが、恐らくは狡猾なる書肆が名を守益に托したものだらう。「正字通」十二卷、張自烈撰、字形類別法によつた字典である。考證は稍廣い。然れ共徵引繁蕪頗舛誤が多い。又明代の修辭論には「文章一貫」及「文章體則」がある。前者は二卷、高琦等が編した。上下二卷に古人論文の法則とすべきものを編輯した。後者は歸震川の撰で、六十六門に分つた。内容は作文上の注意を説いたものである。類書には「洪武正韻」がある。本書は洪武中、樂韶鳳等が勅を奉じて撰したものである。内容は歴代韻書の變遷を敘し

たもので、古法を變じて平上去入二百六部を七十六部に約した。

第四編 近世文學

清朝文學

附現代文學の趨向

第一節 總論

滿洲の一部落であつた清は愛親覺羅氏に至つて都を燕京に遷して中原に君臨したのである。太祖が初めて帝號を稱したのは明の萬曆年間であつて、太宗が國號を大清と改め燕京に逼り尋で朝鮮を取つたのは明の崇禎年間である。續いて聖祖・高宗の英主が出で、清朝の基礎は磐石の重みを加へたのであつた。かくて清朝は内外の整頓を終つて茲に禹域定り、百年の典謨は確立したのである。

初めは滿洲文字を用ゐた。太宗の時、大海榜式に命じて「漢書」を翻譯させたが、世宗

時代には、明代の遺臣を優待し、孔子六十五代の孫をして衍聖公を紹がしめ、子弟をして漢文漢語を學習せしめ、錢・王等の學者を重用する等文教の興隆を圖り、經術を崇ぶ等、文運促進の策を取つたので諸臣の讀書は筆研の間に牢蓋した。殊に康熙・乾隆の間は文華斐然として起り、文人墨客彬々として現れた。この時代は文學の全盛時代であつたのである。「佩文韻府」「淵鑑類函」「古今圖書集成」「四庫全書總目」「大清會典」「康熙字典」等の大著述の出たのも此時代である。

清代の學風は考證を以て特色を發揮してゐるが、初期は明代の遺臣によつて文柄を握られてゐた。清初の三大家と稱せらるゝ侯方域・魏禧・汪琬の文章を初め、詩人には錢謙益・吳偉業があり、考證學の端を開いた顧炎武、性理學の源を發した黃宗義等皆明代の遺臣である。

今第一期康熙迄、第二期康熙後乾隆年間、第三期乾隆以後の三期に分つて重なる著書、詞人學者等を擧げよう。

一、康熙迄（約六十年）

著述には佩文韻府、淵鑑類函、康熙字典、全唐詩等。

古文家には侯方域、汪琬、魏禧、方包等。

經義には顧炎武、黃宗義、朱彝尊、毛奇齡、閻若據、惠士奇等。

考證家には顧炎武、閻若據、段玉裁、焦孝廉、戴吉士、毛奇齡、惠士奇、惠棟、江

永、王念孫、王引之等。

文章家には方望溪、朱竹垞、劉大櫚、姚鼎、姜宸英、袁枚、邵長蘅等。

詩人には錢謙益、吳偉業、宋琬、王朱禎、施潤章、尤侗等。

其他一代の名儒に湯斌、孫奇逢等がある。

二、乾隆（凡六十年）

著述には「大清會典」「大清一統志」「四庫全書總目提要」「十八省志」「皇清經解」「古今圖書集成」等。

詩人には査慎行、勵鶚、蔣士銓、王文治、趙翼、張問陶等。
文章家には袁枚、劉大櫟、姚鼎等。

皆語句清新にして文品は巧緻である。又考證の學の盛になつたのは程子の性理學の反動である。乾隆の三大家とは蔣士銓・趙翼・袁枚の三家をいふ。

三、乾隆以後 乾隆以後嘉慶、道光、咸豐、同治、光緒の間、皆文學は盛であつたが、やゝ強弩の末勢に似た感がある。内賊起り、洋釁迫るに及んで文學も亦衰退を示した。この内、王引之、王鳴盛、戴震等の老儒があり、近くは張之洞、愈樾、吳汝綸、王韜、曾國藩、秦雲、蔣敦復等皆名がある。民國に及んでは用語も新奇に、語法も變ぜんとして混沌たる狀況を現はし専ら典章の更正に忙しく詞章の作に暇なき有様である。最近白話文學の萌芽を見るが、大成の日は遠い事であらう。

第二節 散文界の概況

一、明の遺臣文學 侯方域、字宗朝、雪苑と號した。性豪爽で、慷慨の氣節があるのは艱苦の賜である。父は明にあつて名官たりし爲、彼は一貴公子であり又才氣横溢の文士であつたが惜むらくは不幸短折、年三十七で康熙帝の即位前九年に歿した。頗る文章に巧で、東坡後の第一人と稱せられた。文は氣を以て勝つてゐた。「壯悔文集」の著がある。魏禧字は氷叔、勺庭と號した。兄弟三人所謂三魏中、彼は最頭角を見はしてゐた。文章は縦横家の風があり力を以て勝つてゐて策士の文と稱せられた。彼は左氏、老蘇の文を最好んだ。鍛練を極めた事は方域以上である。汪婉は字は茗文、堯峯と號した。學は六經を根柢として、易・書・春秋に於て大に發明する所があつた。「史稿」の撰がある。顧炎武字寧人、亭林と號した。性耿介で最も心を經世の學に留め、博覽多識、諸子百家皆窺はざるはない。又考證は明確である。天下を巡遊して、明季より山林に屏居して出でない。著者に「日知錄」がある。黃宗義字は太冲、梨洲と號した。浙江餘姚の人である。初め清兵を拒いだが克たず後に亡命したが、母を思慕して止まず遂に歸郷して力を著述に用ゐた。康熙帝、禮を以

て辟したが固辭して至らなかつた。著書に『明儒學案』『宋元學案』『易學象數論』等がある。彼の學は陸王を宗とし、又濂洛の流を綜合して名ある學者の文に該通してゐた。廖燕は柴舟と號す。格を取ることに高くはないが、氣を以て勝つてゐた。彼は終生諸生を以て終つた。金聖歎は評論家である。彼が戯曲の評文評語は、他人の新作に勝れるものがある。但、評論の多くは自家の氣焰である。評文の辭氣勁拔、神氣流動してゐた。李漁は笠翁と號した。喜劇戯曲家で『十二樓』『十種曲』の著がある。彼の作劇は先づ結構を主とし、次に詞彩音律を重んじた。林雲銘字は子仲、評論家である。『莊子因』『古文折義』等評論の書を著はした。當時古文の評釋行はれて、この外馮李驊は『左繡』を著し、吳齊賢は『史記論文』を撰した。

二、重なる文學者 朱彝尊字鉅鬯、竹垞と號した。布衣より出で、召されて遂に翰林院檢討となつた。曾て天下を巡遊したが、これは顧炎武に私淑した爲らしい、文は簡古を尙び詩文共に可にして簡潔醇正である。邵長蘅字は子湘、青門と號し、退いて

山水に情を縦にした。文は簡潔醇正を尙んだ。閻若據は考證家として著名であるが好んで時賢を漫罵し、毛奇齡と互に反駁し合つた。『尚書古文疏證』『孟子生卒年月考』等多くの著述がある。毛奇齡も閻氏に劣らぬ考證の名家である。彼は古人を歴詆した。又『明史』を編纂し、外に『古今通韻』等の著書多く、卓見がある。袁枚字子才、隨園又は簡齋と號した。乾隆年中の人である。詩文双絶で殊に文章は一種銳利の風がある。沈德潛は學問が深かつた。詩は唐詩を主とし、殊に韓愈に私淑した。『唐宋八家文』を選す。桐城派とは方苞・劉大魁・姚鼐の一派を言ひ、儒者の文である。彼等の功績は一種の古文の血脈を後世に傳へた事にある。方苞字は靈阜、望溪と號した。文は典雅醇正にして古文の義法を得てゐたが簡潔を以て能とした。弊とする所は、光芒なく、用語の貧弱な點である。但、學術の精深なる事は一代の宗たるに恥ぢない。乾隆年間に卒した。著書に『周官集註』『春秋通論』『禮儀折疑』『史記補註』『望溪集』等がある。陽湖派とは惲敬一派をいひ、要するに策士の文で

ある。惲敬字は子居、簡堂と號した。陽湖派の祖である。姚鼐字は姬傳、惜抱と號した。桐城派の文士で聲望がある。文は淵雅を以て勝れてゐる。著者に『九經說』『三傳補注』『老子章義』『莊子章義』『古文辭類纂』『惜抱軒文集』等がある。劉大櫆字は耕南、海峯と號した。清宕の文を以て名がある。方苞は彼を賞して韓歐の才があると言つた。『海峯文集』八卷がある。姜宸英字西溟、湛園と號した。文を善くし兼て書法に精しい。名は夙に宮闕に迄聞えたが事によつて獄中に冤死した。愈越は時人南愈と稱した。故の太史である。張之洞は政治家であつて文をよくした。時人北張といふ。西湖總督となつた。愈・張二氏南北にあつて文名を馳せた。この外、湯潛庵、宋任琇、包世臣、龔自珍、曾國藩、張釗、吳汝論、王紫詮等皆名がある。王紫詮の著に係る『普法戰記』は才華ある筆である。

第三節 韻文界の概況

一、明の遺臣文學 民の遺臣で詩人たるものに錢・吳の二家がある。錢謙益字は受之、

牧齋と號す。文才あり、其の作る所の詩も亦巧であつた。彼の極力排斥した處李は王の古文辭であつた。著述も少なくなかつたが、詩文箋注の類は乾隆の朝に焚燬せられた。蓋、節義なく臣節全からざりしが爲である。著作に『初學』『有學』の二集がある。吳偉業字は駿公、梅村と號した。著書は頗多いが文はさまで賞するには足りない。詩は初婉麗であつたが後に蒼勁となつた。香奩の一體は殊に妙手である。彼の作『永昌宮詞』は白樂天の『長恨歌』と並び稱せられた程である。我國近來彼の作を喜ぶものが多い。

二、重なる詩人 王子楨字は胎上、阮亭又は漁洋と號した。漁洋は「詩畫一指、詩禪一致」の説をなし、清秀俊逸の才を以て興會神到の説をなした。不著の一字はその眼目で、盡得風流の神秘説をなした。詩は嚴羽より出で神韻説を以て宗とした。刻苦して神韻を求めんとし、寧ろ修辭に傾き李王の古文辭に近いのはやゝ本意を失するに似てゐる。著書に『古詩選』『唐賢三昧集』『池北偶談』『香祖筆記』等がある。

施閏章字は尙白、愚山と號した。性忠愛にして朋友の誼に厚い。辯に吃で語は頗艱ひけれ共、善く古文を屬し、特に詩に妙である。詩文共に醇雅を以て勝つてゐる。「學堂餘集」の著がある。尤洞は好んで街談俚語を用ゐ、時として俗に近い詩もあつたが晩年格を改めて高邁の詩を作つた。朱彝尊字錫鬯、竹垞と號した。廣く經史に通じ、詩文共に妙である。自ら常に謂ふには「詩文は須らく經史に本づくべし」と、詩は古體に長じて填詞に妙を得てゐる。一代の詞宗たるに愧ぢない。袁枚は乾隆三家の一人で、稀に見るの大才である。詩文共に雙絶の譽がある。性靈説を唱へ、漁洋の神韻説に反抗した。蓋、詩は人の性情であるといふ古語を根據としたのである。文は駢體が尤工で、詩は七律を最とし、七絶・五古之に亞ぐ。著書に「隨園詩話」がある。袁の王を駁するに對し、王の門人、沈は袁を攻めた。然し何れも大家である。沈德潛字は確士、號は歸愚、王子楨の門人である。殊に韓愈に私淑し、袁枚と相對立して自ら一旗幟を建てた。蔣士詮字は心餘、號は清容。彼の性は殊に情

に深く、義に勇んだ。詩は黄山谷を宗とし、七言古詩に妙である。又彼の詩才は史眼を兼ねてゐた。著書に、「忠雅堂集」がある。詞には「銅琵琶」があり、別に「文集」もある。傳奇には「紅雪樓九種曲」の作がある。趙翼字は雲松、甌北と號した。史才がある。「通鑑集覽」を修めた。詩は尤も長じてゐた。著書も多いが就中、「甌北詩話」は支那律語の批判であつて「彫龍」「詩品」にも勝る價值がある。その外「甌北集」「二十二史劄記」「武功紀盛」「陔餘叢書」等も彼の著である。趙執信字は伸符、秋谷と號した。王漁洋の女婿である。著書に「談龍錄」「聲調集」「飴嵩集」等がある。

これ等の外、女流詩人には、王韞蘭、朱道珠、倪瑞璿、蔡季玉等があり、縉徒詩人には止品、同揆、成鷺、超遠、宗渭元璟等がある。

第四節 戯曲及小説

一、總説 清代の戯曲小説界は活氣の横溢せるものがある。就中戯曲には桃花扇、長

生殿があり、小説には紅樓夢、兒女英雄傳があり、何れも一代の傑作である。これ等は康熙文學界にあつて爛熟大成せる詩歌文章と相映發して、玉振の功をなしたものと云はなければならぬ。

二、有名なる戯曲

『桃花扇』本書は孔尚任の作である。尚任字季重、東塘又は云亭山人と號した。云亭は孔子の遠裔である。云亭は詩に巧で『湖海集』の著がある。本書の内容は才子侯方域を主人公とし、配するに佳人香君と、道士瑤星とを以てした。一部通篇四十四齣、侯・李の情事を經とし、明の社稷の覆滅とを緯とし、配するに花月消魂、紅燈綠酒、兵馬倥傯、金戈鐵馬の景とを點綴した。脚色は自然で、『西廂』の平板、『牡丹亭』の荒唐なると選を特にしてゐる。文章は填詞頗妙で、當時の王公搢紳、借鈔せざるはなく、時に洛陽の紙價貴きを致し遂に乙夜の覽に入るに至つた。要するに清朝戯曲の第一である。(第二卷參照)

『長生殿』は洪昇の作に係る。洪昇字は昉思、詩を王士禛に學び、才名一世に高かつた。執信の陥擠せらるゝに及んで事により昇も亦斥けられ一生を坎坷不遇の裏に終つた。本書の内容は『長恨歌』を敷張して、五十齣の傳奇としたものである。

詞彩の妙は『桃花扇』と相譲らない。

『紅雪樓九種曲』は蔣士詮(藏園)作。香祖樓・空谷香等の傳奇凡そ九種を集めたものである。内容は大抵史上の事實に取つた。長きものは數十齣より成り、短きものは數齣ぐらゐから成つてゐる。辭藻は脚色に好く叶つて、典雅婉麗、神采奕々たることは乾隆中獨歩との評がある。彼は詩を以て乾隆三大家の一人に數へられた人である。彼が戯曲は實にこの詩想より出たものだらう。

『吟風閣詞曲譜』は楊笠湖の作。通篇四卷三十二齣から成る。内容は史事を潤色したものである。作者、名は潮觀、字は宏度、笠湖はその號である。彼は性倜儻で、才氣縱横、詩・畫に妙を得てゐた。

三、有名なる小説

『紅樓夢』、本書は清朝小説の冠冕で、戯曲界の巨臂、『桃花扇』と相對して乾隆文學界にあつて萬丈の光焰を擧げてゐるものである。作者は曹雪芹といはれるが審ではない。本書は又『石頭記』とも言ふ。内容は金陵の十二釵なる情話を経とし二百三十五人の男子と二百二十三人の女子と之に係り、榮國・寧國二府の盛衰とを緯とした。局面頗複雑である。才筆縱横、通篇百二十回、凡て藻思爛漫として絢爛の美を極めてゐる。(第二卷參照)

『兒女英雄傳』は紅樓夢に亞ぐ大作である。燕北間人の作。内容は俠兒の心事を叙べたもので、運筆は適麗にして且雅健である。

この外小説に『品花寶鑑』、『花月痕』、『肉蒲團』等があるが何れも淫猥に流れてゐる、唯『燕山外史』は駢儷體の律語で、敘事、運筆等共に前記三書に勝つてゐる。

四、近時の小説

近時の小説の重なるものは次の通り。

『野叟曝言』 康熙中、常州の一書生である夏生の著したものである。内容は一部百餘回、王陽明が、宸濠を擒にする舊事を叙した。大作たるを失はない。

『女仙外史』 逸田叟作。一百回、結構は雄偉で文も亦之に協つてゐる。

『金雲翹傳』 青心才人著。二十回。

『平山冷燕』 荻岸山人著。二十回。

『今古奇觀』 抱甕山人編。四十回。一回一事の短篇小説。

その外少なくないが、何れも陳々相仍り見るに足るものは多くない。

第五節 近時文界の趨勢

一、近時の詞人 近時の詞人の重なるものを擧げると、

曾國藩は不世出の偉才でその文は條理暢達して、篇々皆朗誦してよい。王韜は新聞記者中で名があつたもので、字は紫詮、號を瘦園といふ。會て歐洲に遊學し、歸

つて『滬報』を主管した。『瘦園文集』『瘦園尺牘』等の著がある。秦雲は字を膚雨といひ詩人である。『西背山人詩集』の著がある。蔣敦復は字は純甫といふ。詩集に『嘯古堂集』の著がある。詩は七古及び樂府に巧で、務めて變調を出した。又彼の變法自彊で有名な康有爲も文章家として有名である。

二、近時の詩 世を擧げて黄魯直の江西派を學び、兼て東坡に及んでゐる。近時の詩には皆江西の臭味がないものはなす。されば唐詩の神韻は求むることは出来なす。參考として唐宋の詩を比較すれば

唐詩—特長は風調にあり、氣魄に乏しきは缺點である。

宋詩—特長は性靈にあり、輕に薄流れるのは缺點である。

これを見れば、宋詩を宗とする近時の詩の傾向がわかる。

三、近時文界の傾向 近時流行してゐるものは主として西歐の小説と我が法政書類の翻譯である。進化の理法によつて用語は新奇に、語法も亦變つて來た。要する

に未だ混沌の域を脱しない有様である。即専ら典章の更正に急で詞章の創作に暇ない状態を免れない。現在の文學者では彼の變法自彊で有名な康有爲氏がある。彼は桐城派の流を汲む唯一の耆宿である。又最近胡適氏等の主唱す白話文學はやゝ文界の革命的性質を帯びてゐる。白話即口語體を以て各種の文學に應用して創作を試みようとする主唱が、かなり大きな波紋を形づくつて、現在では餘程その渦紋を大きくしてゐる。胡適氏は十九歳の時(民國前二年)米國に留學して歸朝し、まだやつと本年(大正十一年)二十八歳計りの青年である。彼は白話を以て、詩、小説、戯曲等に應用することを主唱し、確實な論旨を發表してゐる。雜誌『新青年』の主宰者北京大學教授陳獨秀氏、その外同大學の教授等にも共鳴者があつて現在では個人的一家言として計りでなくやゝ廣く固い根ざしを以て擴充されつゝある。然し、これがどれ程迄發展するかは勿論逆睹し難いが、現在の状態は頗幼稚で心細い感じがないではない。白話文學の偉大なる創作家が出る迄には相當の時日を

要する事だらう。白話文學に就ては第二卷『漢文學概論』中にも述べてある故参照されたい。

以上を以て支那文學史の綱要を終る。

【参考】 清朝の雜著二三に就て略述を試みる

『全唐詩』九百卷、目錄十二卷。康熙年間、彭定求等勅を奉じて編んだ。故に御定の二字を冠す。作者二千二百人、詩數四萬八千九百餘首、帝王后妃、樂章、樂府等に分類した。體例は謹嚴で、二校訂は周密である。『全唐文』一千卷。嘉慶年間董誥等勅を奉じて撰した。體例は全唐詩と同じである。『馬氏文通』十卷、馬建忠撰。文通とは文章の通則といふ意である。本書は西洋の文典に倣つて作つた。その引據する所の例は大抵周秦漢の經傳より撰して編纂は頗整齊である。

『佩文韻府』四百四十四卷、張玉書等七十六人、七ヶ年を費して成つた。經・子・史・集の次を以てその出處を注した。韻字によつて索引することは専門家以外の困難とする所である。『佩文韻府約編』三十冊、鄧愷編、これは前書を約めて簡便ならしめたもの。『淵鑑類函』四百五十卷、勅命によつて撰した。本書は古今類書の淵海である。諸書を博採し、益すに唐・宋・元・明の詩文事蹟を以てした。内容は太平御覽より多きこと三分の一程である。『四庫全書總目提要』二百卷、乾隆年間、勅命により紀昀等撰す。四庫は經・史・

子・集四部の書庫で、四庫全書とは高宗の蒐輯した一大叢書の名である。本書はその總目の條下に諸書の大要を掲げ解題したものである。『四庫全書簡明目錄』二十卷、乾隆中、于敏中等諭旨を奉じて撰す。總目提要を簡便にしたもので部類子目は總目提要と異ならない。『康熙字典』四十二卷、康熙年間、張玉書、陳廷敬等勅を奉じて撰して、十二集、百十九部とした。本書は玉篇、正字通を本とし諸書を校合して編纂したものである。各字の下に各韻を列し、其の義を訓釋し、次に別音、別義を列し又古音を列し、舊典を引證し、案語を加ふる等よく整齊してゐる。蓋し支那字書中最も傑出したものである。採收する所の字數は四萬〇九百四十五字である。我國では安永年間本書を鐫刻した。『唐宋詩醇』四十七卷、乾隆年間の勅撰で御選の二字を冠してある。この中、李白八卷、杜甫十卷、白居易八卷、韓愈五卷、蘇軾十卷、陸游六卷に分けてある。大旨は李杜を以て正宗となし、他の四家を羽翼とした。每人總評あり毎詩評註あり、悉く乾隆帝の裁する所に出たものである。『御選唐宋文醇』五十八卷。唐宋八大家文鈔及唐宋十家文の去取評論の盡さざるを以て、乾隆帝が儒臣に命じて補綴せしめたものが本書である。この中、韓愈文十卷、柳宗元文八卷、李翱文二卷、孫樵文一卷、歐陽修文十二卷、蘇洵文四卷、蘇軾文十三卷、蘇轍文三卷、曾鞏文四卷、王安石文一卷に分けてある。本書は明理載道、經世致用の文を主として空言に涉らぬものを撰んだ。

支那文學史綱要 完

一、天命之謂性。率性之謂道。修道之謂教。道也者。不可須臾離也。可離非道也。是故君子戒慎乎其所不睹。恐懼乎其所不聞。莫見乎隱。莫顯乎微。故君子慎其獨也。喜怒哀樂之未發。謂之中。發而皆中節。謂之和。中也者。天下之大本也。和也者。天下之達道也。致中和。天地位焉。萬物育焉。(中庸)

二、誠者天之道也。誠之者人之道也。誠者不勉而中。不思而得。從容中道。聖人也。誠之者。擇善而固執之者也。博學之。審問之。慎思之。明辨之。篤行之。有弗學。學之弗能。弗措也。有弗問。問之弗知。弗措也。有弗思。思之弗得。弗措也。有弗辨。辨之弗明。弗措也。有弗行。行之弗篤。弗措也。人一能之。己百之。人十能之。己千之。果能此道矣。雖愚必明。雖柔必強。(中庸)

支那哲學史綱要

凡例

- 一、本編は支那哲學變遷の概要と、重なる學說の大綱とを略述したもので勿論専門的の編著ではない。然し、僅々數十頁の記述の中には要を失はないことに努めたから、文檢漢文科研究者の爲には決して不足を感じないこと、信ずる。
 - 二、本編は時代を追うて記述したものであるが、努めて概要に止めたので、まゝ重なる哲學者を中心とした爲嚴密なる時代順の配列を破つた所もある。
- 一、本編の外、一層詳細なる研究を欲するならば、宇野博士の著述『支那哲學史講話』及同氏著『支那哲學の研究』の二書が尤もよろしい。本編は遠藤博士の説を主として略述したものであるが故、記述に於ては右二書と殆んど重複する憂がない。因に宇野博士の著は二書とも大同館の發行に係るものである。

第四卷 支那哲學史綱要

總論

第一章 支那哲學の概観

古代哲學 唐虞より秦の一統まで。

支那哲學思想は端を北方の社會的實際的思潮に發してゐる。孔子は之を繼承して完成し、且つ之を發揮した。又老子・列子・莊子・墨子・子思・孟子・荀子の徒は孔子前後に輩出して、所謂諸子百家の輩が頗活躍した。これ皆社會維持の觀念によつて影響されたものである。

中古哲學 秦より五代の終に至る。

(七) 劉折子—伊文子—公孫子—惠子 淮南子—董子—楊子

二、中古哲學

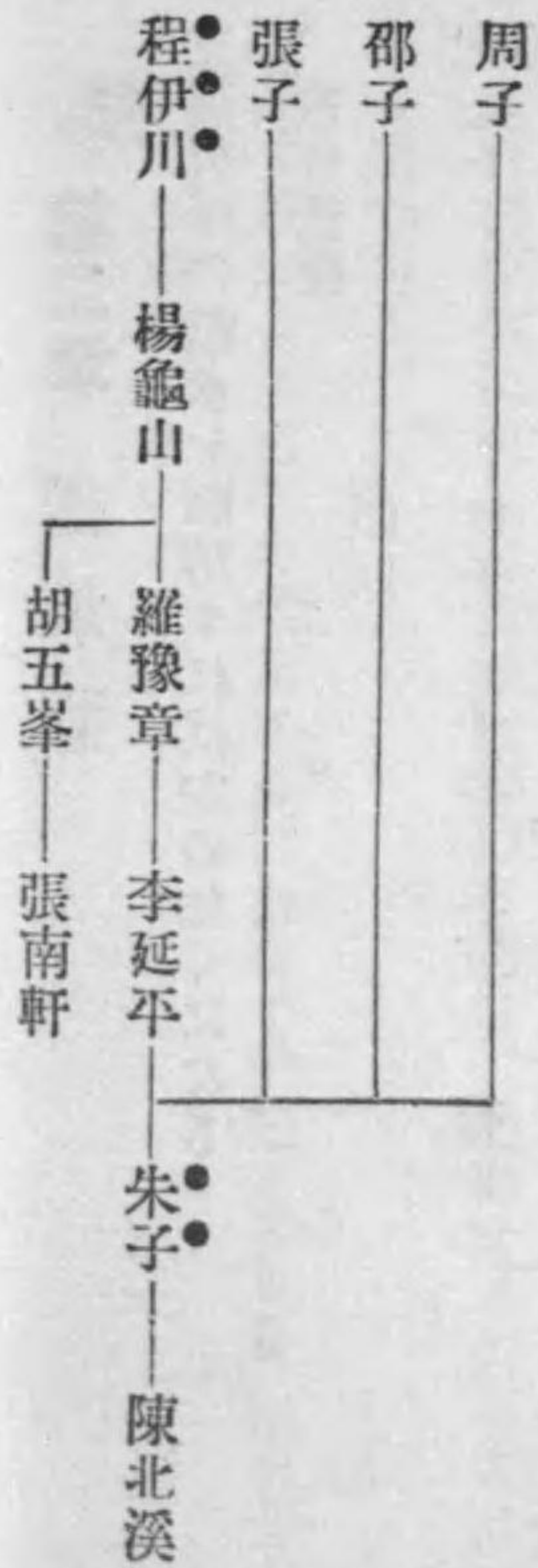
傅玄：葛洪

張融：顧歡：譚峭：王通

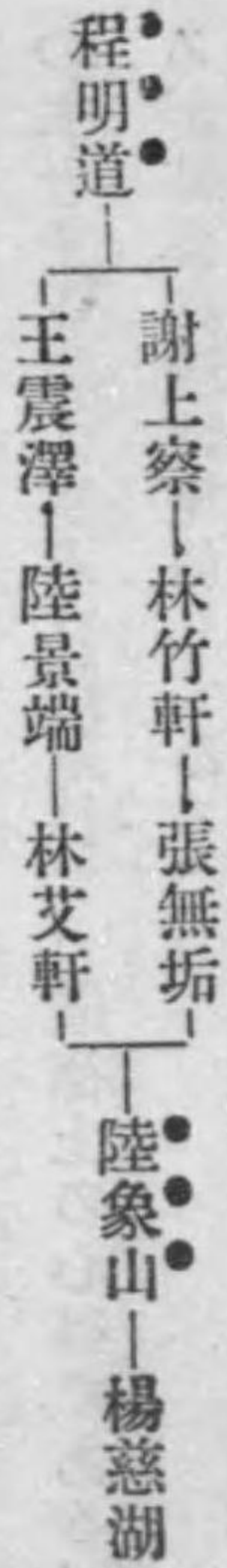
韓退之：李翱：陳博

三、近世哲學

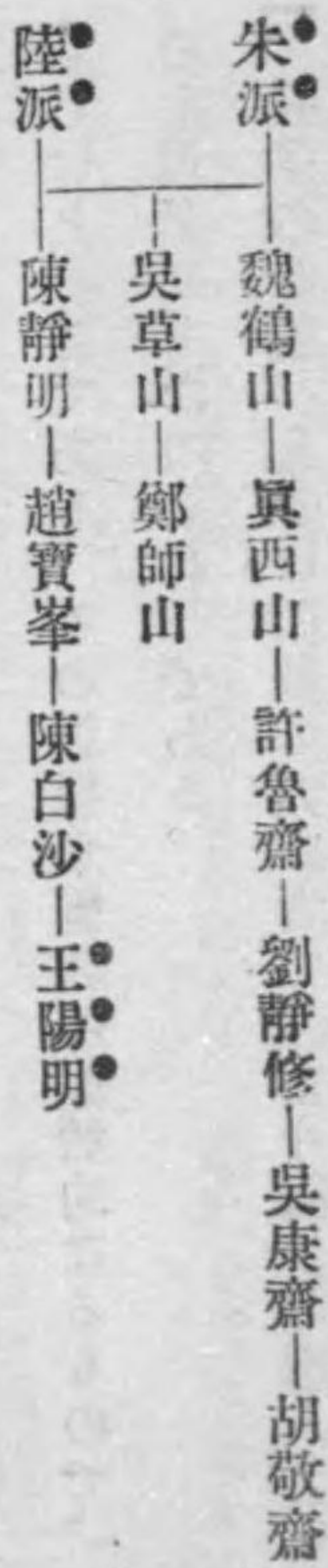
(其の一)



(其の二)



(其の三)



第一篇 古代哲學

第一章 原始的儒教と孔子の教義

古代哲學に關しては第一卷汎論及第三卷支那文學史を參照されたい。彼此對照すれば發明する所があらうと思ふ。

一、**儒教の意義** 儒教とは支那の歴史的道德の自然に發達して成立したもので、修身齊家治國平天下を理想とする教義である。されば一面は實踐倫理學を主とし、又一面は政治學を兼ねたものである。周禮に「儒者以道得民」とあるより見れば、儒は周代の官名であつたのだらう。これが儒字の見た始である。韓詩外傳には「儒者濡也、以先王之道能濡其身」とある。即ち儒とは他人を教化し、溫和善良ならしむとの意である。この思想が儒教の原始的なるもので、これを大成して學問上の主義を立てたのは孔子である。

二、**孔子の教義** 孔子は儒教の大成者で、古今獨歩の聖人と仰がれてゐるけれ共又一面には一個の學者であつた。先王聖人の主とする所は政治その物であつたが、孔子の主とする所は寧ろ實踐道德で、道德上の心得である。兩者は直接目的は異つてゐるが結極相疏通連絡してゐる。

仁は孔子の修養の理想であつて、仁を以て根本原理とした。即仁によつて一切の

作用は統一せられるとした。

三、**孔子の仁** 孔子は一貫思想を以て萬事同一の心持を實行した。この心持が即仁である。論語に「吾一以貫之」「吾道一以貫之」など、言つてゐるのは即この一貫思想である。然し要するに仁とは一種の情調と見てよろしい。

元來仁とは支那當時の禮義により、經國濟民の至情に由り、着色せられたる感情であつて、主たる所は主觀的なるにある。唯仁を重大視して根本原理としたことは孔子に始まつてゐる。

四、**孔子の性説と教育** 孔子は性に就て「性相近也習相遠也」と言つてゐる。性は大抵同じであるが、教育によつて或は上となり或は下となるとの意である。孔子の教育法に就ては論語に「憤せざれば啓せず、悱せざれば發せず、一隅を擧げて三隅を以て反へさざれば即復せざるなり」とあるより見れば、開發主義・努力主義であることがわかる。憤悱と三隅を以て反するとは何れも努力の結晶である。又、孔子の

門人に教へた教科目は六藝である。

五、孔子の門人 孔子の門人は頗る多かつた。その内身六藝に通ずるもの七十餘人もあつたが就中顔回・曾子・子夏の三人は尤も傑出してゐた。三人の中、曾子と子夏とは孔子の學を繼承して後世に傳へたが顔回は孔子の弟子中最傑出してゐたに拘はらず、不幸にして早世し、著書も門人もなかつたので、その學説は世に傳はらなかつた。

(1) 曾子……忠恕を根本義とした。尤道德に長じてゐた。

(2) 子夏……文學に長じてゐた。孔子の學術的方面を繼承した。

【参考】孔子の教義及傳記に就いては第一卷第三章論語及春秋の項を參照されたい。

第二章 孔子の後繼

一、子思 子思は孔子の孫で、伯魚の子である。道を曾子より受け「中庸」を著した

と稱せられる。子思の根本思想は誠と中庸とであつてこれが倫理の本體である。子思の思想には先天良心説の萌芽が認められる。即ち一切の倫理は皆人の性に率つて作られたと説いてゐる。子思の中和の説を左に示せば、

中||喜怒哀樂の未だ發せざるもの、天下の本體、誠の主觀的方面。

和||發して節に中るもの、天下の達道、誠の客觀的方面。

又中庸とは過不及なく、偏倚なく、久しきを経て易らざる道で形式的方面である。

(卷一、第三章『中庸』の條參照)

二、孟子 孟子は性善説を唱へ先天良心論者である。又四端説をなし擴充の工夫を述べた。四端の心を知と意との方面より見て良知良能の説を唱へ良心を論じた。良心とは孟子のいふ心であつて、良心の存在は忍ぶべからざる人性によつて證明せられる。所謂惻隱の心がこれである。又浩然の氣を論じた。これは先天良心を擴充し一舉一動此に従つて實行し、俯仰天地に愧ぢざる心地をいふので、即氣とは良心の活動

して止まざるものである。孟子は牛山の木に譬へてゐる。今、孔・曾・子・孟の傳統を示せば次の如し。

孔子(仁)―曾子―(忠恕)―子思(誠)―孟子(先天良心説)

(委曲は卷一、第三章『孟子』を参照せられたし。)

三、荀子 孟子の歿後數十年にして荀子出で性惡を唱へた。性惡の内容は今日の所謂欲望と人情との二方面から論じてゐる。性惡論に就て少しく述べよう。

荀子は人の性は惡である。其の善なるは偽りであると論じた。何となれば(一)人生れて耳目の欲がある。(二)人生れて利を好む。(一)に従へば淫亂生じ禮儀文理亡ぶ。(二)に従へば殘賊生じ忠信亡ぶ。故に本來の性に従へば社會は秩序亂れ、風俗壞るゝの基となる。凡そ人は己に無いものを求める。今若し性善と言はゞ之を求むるの意がなくなるだらう。性惡と言つたならば大に善を求めるの心が出るだらう。故に人の性は惡なりと言はざるを得ないと論じてゐる。

性惡の批評 欲望は先天的のもので如何ともすることが出来ない。従つて性惡の内容は主として欲望である。然し欲望其のものは必ずしも惡の意味はない。故に荀子の性惡は文字の濫用と言はねばならぬ。

又荀子は禮を以て動物的性欲を節し各人の相争ふことを撓め、圓滿なる共同生活を遂げしめんとした。但し、茲に言ふ禮とは範圍廣く、法律・制度・善風俗・良習慣等をも含んでゐる。又樂も刑と共に教化の要具であり、治平の機關として必要なことを論じた。右の如く禮樂を重んじた點は孔子の教義に近いが、性惡の文字は勿論妥當でない。(第二卷、第二編、子文學參照)この外先秦時代には儒教の外、道家・墨家・揚家・法家・折衷派(鶡冠子)・思索派(名家・詭辯家・雜家)・陰陽家・農家・兵家等が輩出した。これ等は第三卷支那文學史綱要中に述べてある故、參照せられたい。

第三章 老子の教義

一、老子思想の起原 諸説がある。(一)地勢に影響して起つたと説くもの(二)印度波羅門の影響とするもの(三)古來の説を集大成したと論ずるもの等は主なるものであるが、何れも根據は薄弱と言はねばならぬ。吾人は遠藤博士の説に従つて(四)時勢に反抗して起れるものとの説に左袒する。古代支那には數多の民族が存在して常に相互に軋轢した。天子たらんが爲には必ず競争難關を通過しなくてはならない。而して此の如き競争場裏に於て最後の勝利を贏ち得る爲には徳に依らなければならぬ。又劣敗者の衷心から念へば怨恨悒鬱の情に堪へないものがあらう。彼等政治上の劣敗者は政治上の失意のみに了らず、延いては生存競争場裡より落伍しなくてはならない。此に於てか王位を見ること弊履の如く、人爵を遇するごと沙磧の如くなるものも出来る。かくて老子流の思潮は鬱然として起つたのである、とは遠藤博士の説である。

二、老子以前の老子流の人物 (一)黄帝は支那文明に於ける一切の傳説の淵源であつて、老子教の祖と稱せられる。(二)管仲は老子流の人物で論語・左傳等にその傳記の斷片がある。(三)范蠡も同様の人物。左傳・史記等に傳記がある。(四)太公望は周の武王を輔けて殷を亡した人。

この流の人物は獨り古代のみでなく、又支那のみに限らず後世に於ても我國に於ても將た外國に於ても見られる。

三、老子流の思想と時勢 此の流の思潮は當時に於て殆んど天下に蔓延した、『史記』に従へば老子(老聃)は楚の苦縣の人であつて、苦縣は元、陳に屬してゐたことより見ると南方の人ではない。故に老子の學を稱して荆楚の學或は南方の學といふのは妥當でない。唯その淵源を異にせる北方思想(遠藤博士説)と見做すべきものである。適當に言へば南北の別なく單に支那古代に於ける二大思潮の一と見るべきである。

あらう。當時の世相は血腥き風が四隱に満ちてゐた。これが爲心あるものは利欲の念より離れ世外に超然たらんとしたのである。

四、老子前後の哲學思潮と老子の地位

老子以前の思想状態……禮樂發達した。その結果繁文褥禮に陥つたのは缺點であつた。管仲は有名なる法律家であり又政治家であつて一種の哲學思想を有してゐた。(その他は文學史參照。)

老子以後の著名なるもの……孔子は仁を以て根本主義とし經典を以て子弟を教養した。又五行哲學は夏の時代から存在してゐたが、この時代は特に盛であつた。五行哲學は木・火・土・金・水の五元を以て宇宙の根本原理とするものである。而して相生、相剋相循環するとなした。

相生水↓木↓火↓土↓金
相剋水↓火↓金↓木↓土
相循環す。

この間に老子が出た。老子は支那哲學中最初に位すべき人物である。老子の處生哲學が出てからこの流の人物は増加し、又同時に種々の哲學も勃興した。

五、老子の根本主義 老子は宇宙の本體を假に名づけて道(無)といふ。(一)道は無名にして玄々、視るべからず、故に玄といふ。(二)道は發動して有名となる。森羅萬象はこれである。故に衆妙の門といふ。(三)道は時間及空間を超越し、因果律を超越して萬物より先に存在してゐる。即獨立獨存してゐる。(四)道は萬物を生ずる活動力があり又萬物を統帥する支配力がある。(五)實踐哲學を應用して宇宙であると觀察し、無に重大なる意味を附與した。

老子教は古來の格言を蒐めて大成したものであつて、大體の傾向は處生法である。即一身を全うするを根本主義としてゐる。功を求めず、名を求めず、勞とせざる所は佛教に似てゐるが、老子は解脱を目的としない。故に所謂功利主義の一種であるとも言へる。一身を全うすることを以て最後の勝利を博せんとすることは活動

せざるに似て、大に活動してゐるものである。一見「如虚如無如静」然も巧妙なる處世法によつて一身を全うするのである。

老子の無とは處世に在る。即實踐哲學に立脚地を置く。

六、老子の處世法 根本主義は實踐哲學である。彼は功名富貴を忌んだのではない。寧ろ之を得んとしたが唯之が爲に一身を全うしないことを恐れたのである。故に努めて虚無恬憺なる退嬰的消極主義を採つて、己を卑うし、人と争はず、好く柔好く弱に、以て其の終を全うし、結極剛強に勝たんとしたのである。即最後の勝利を博するを主義とした。「柔之勝剛、弱之勝強」と老子の本文に見える。然し、説く所個人的道德には親切であるが、家族的社會的より見たる教は少ない。

老子が實踐道德上善とした徳目は、(一)上善は水の低きに就くが如く謙遜・卑・弱・柔和なる行。(二)人生の三寶とする處は、慈(即柔弱)・儉・後(即遜)。(三)質素儉約。(四)柔弱。(五)知足安分。(六)満盈を戒む。(七)心身を清淨にす。(八)寡黙等である。

七、處世法の哲學的意味 老子は根本主義を以て矛盾的相對的境涯を超越してゐるとなす。即老子の所謂眞の道とは善・惡・美・不美等の相對的言語を以て形容することとは出来ないものとなし、絶體的の或情調を以て根本となす爲、高きを好まず、争論をなさず、顯るゝを欲せず、努めて己を卑に置かしめるのである。

八、政治上に於ける無 老子は政治上にも無を應用した。即放任主義である。君子は自ら進んで人民をして無智の状態ならしめることを最必要となした。禮樂政刑を廢し、無爲自然になれば天下は初めて太平であると説いた。又戰鬪にも之を應用して、力を勞すること少く、功を收める事多からんを望んだ。

九、孔老思想の比較 二者共向古主義なる點は同様であるが、異なる點を比較すれば孔子は理想を堯舜時代に求め、人事的にして社會的であり、又經驗的で實際的である。要するに倫理的である。

老子は理想を堯舜以前に求め、虚無的にして非社會的であり又形而上的で仙人的

である。要するに哲學的である。

第四章 老子以後の道教派

老子以後に列子・莊子等がある。これ等の哲學説を略述して見よう。

一、列子 列子は老子後孟子前の人である。列子の書は列子の自著であるかどうかは疑問であるが、宇宙萬物の必然的なることを述べてある。又自然界の眞理と精神修養とを以て目的とし、出世間的に一個の見解を立ててゐる。彼の宿命論は『各自定分がある。凡て必然的法則の支配によるもので因果の關係によつて一定せるものである。故に意志を用ゐず一切を自然に委せ、生死も悉く自然のまゝとする。』との説。されば政治説も放任主義で老子の説に一步を進め、無何有郷を理想國とした。彼の哲學説は神秘的で悟道觀を述べたものである。しかし、個人的であり、消極的であり、懷疑的であつて勿論實踐的ではない。今老子の思想と比較すれば

老子 積極的理想を有し社會救済の意志がある。修爲法は世間的で幻術夢を説かな

し。理想は古の聖人にある。

列子 消極的沒理想で羽化登仙的である。全く出世間的で幻術夢を説く。理想は神人たるにある。

二、莊子 莊子は孟子と時を同じくした。列子の思想を受け、人心を絶對の域に住せしめ一切の執着を離れ、比較相對界を離れんとした。多くは寓言によつた。

天真論 心を絶對域に住せしめ眞を保たしめる。即心を誠にするを重しとし、客觀的の禮儀作法に拘束せられないやうにするのである。莊子は次の如く説いてゐる。『其禮者世俗元所爲也。眞者所以受於天也。自然不可易也』と。

絶對理論は『逍遙遊』『齊物論』の二篇に詳論してある。即前述の如く人心を絶對の域に住せしめ世の毀譽褒貶等に累はされず、一切の執着を離れ、己が位置に安んじて悠々として餘裕を保ち、比較相對界より超越せんとした。右の二篇は莊子三十

祈つた。醫は人の病を治す。巫と相互の関係深いことは醫字は元醫であつたことを見ても分る。醫は又方士とも関係があつた。

第二篇 中古哲學

第一章 漢代の思想界

一、漢代概観 漢初には叔孫通・陸賈・伏勝等が排出した。又淮南王・董仲舒・劉向・楊雄等は前漢時代の錚々たるものである。後漢時代には光武皇帝は前漢の宿弊を改め風俗を一洗された。故に清節の士が輩出したが、老莊思想は上下一般の崇尚する所であつた。この時代、班彪は『王命論』を作つて帝王たるものの一定の運命に司配せらるゝことを論じ、班固は父彪の志をつぎ『漢書』を大成した。又王充は『論衡』を著して一切の典籍を批評し、王符は『潜夫論』を著はして一元氣を主張し、天人

感應の説を述べた。

三、其他の思想家 史學家には司馬遷があり、孔子を尊び、『史記』を著はした。訓詁家には孔安國・鄭玄・馬融の徒がある。詩賦家には屈原・宋玉・景差等がある。

第二章 前漢の神仙家

一、神仙家 秦の始皇帝は神仙説を信じたが、漢代に入つても歴代の天子中尊信するもの少くない。従つて當時の社會には勢力があつた。迷信は何れの時代にも行はれるもので止むを得ないことではあるが、君主が之を信ずるに至つては特異なる現象と言はねばならぬ。

二、重なる神仙家 方士李少君は前漢武帝時代の人で、深く天子に信ぜられた。彼は丹砂化して黄金となすべしと言つた。文成將軍李少翁も亦武帝時代の人。五行相勝説をなし、人と神と相通ずと言つたが失敗に終り誅せられた。五利將軍樂大も亦同

時の人。不死の藥を輸すべしと言つたが、之も失敗して李少翁と同じ運命に値つた。公孫卿も亦同時の人。蓬萊遠からずといひ又數丈の大人を見たと言つた。武帝は神仙方術の士を信じ經營至らざるなかつたが事皆功を奏しなかつた。然も猶神仙の説は消滅せず社會の心理を支配したことは、これ等の説が當時の社會に如何程の勢力を占めてゐたかが推察される。

第三章 前漢の思想家

(第二卷第二編參照)

一、淮南王安 道家を根本として儒家・法家・兵家等の説を調和したもので統一がなす。萬物の本體を道とし、道は絶對無限で虚靜である。人の性も亦道なるが故に虚靜であると説く。これらは哲學的である。又萬物感應交通の説をなした。學説は『淮南子』に悉しい。然しこれは門下の士の撰述に係り、淮南王安の自著ではない。本書に鴻烈の名を冠したのは、鴻は大、烈は明の意で、大に道を明かにする書との義

であるが、内容雜駁の點は百科辭書的の觀がある。故に神話・傳説・俗間の信仰等を知るには便利のよい點が少くない。

二、董仲舒 仲舒は尤「春秋」に長じて、拜天宗を以て根本とした。彼は天人感應論者であつて、天と人とは性情相通じてゐる。人は天を父として尊敬しなくてはならないと論じた。

天人同形論 道の本源は天に出づ。天は無上の有形的實在である。天は萬物の源になると同時に吾々人類の祖先である。現象界の事實は運命で、これは天の命である。天と人とは性情相通ずるもので天は人の父であると論じた。その證明は頗原始的なることを免れない。そこで天に十二ヶ月ある如く人に十二大節があり、天に三百六十日あるが如く人にも三百六十小節があるとした。

政治説 政治は天に則るべしと論じた。天に陰陽あるが如く人間界の陰陽である賞罰を設ける必要がある。政府の組織も亦天に則り、天子の下に公・卿・士・大夫

の四階級を置き、天子の下に三公を置き、一公の下に三卿を置き、一卿の下に三大夫を置き、一大夫の下に三士を置くべしと定めた事は、天なる語は宇宙を包含するが故に、天地人三才といひ、又春夏秋冬四季と言ふ所から三と四とを以つて天の數としたによるのである。

性論 可能性説をなした。即人の性は可能性を有するもので教によつて始めて善となるものであると。

著書に『春秋繁露』がある。

二、揚雄 揚雄は玄を本體となして大玄論をなした。玄とは『易』と『老子』とを調和したもので、自動的精靈的力學的のものであり、現象界を總括し支配するものである。宇宙論 玄が宇宙を支配する法則を三とした。時間には始中終があり空間には上中下がある。この三なる數は即根本法則である。(この説は邵康節が繼承したが、康節は四を以て根本とした。)

性論 善惡混存説である。孟・荀以下の性説を調和せんと努めた。即人は各善惡二要素を含んでゐる。そこで善に従へば善、惡に従へば惡となる。この二因子を驅使する心的能力は氣である。氣は義を標的として二因子を驅使せねばならない。

第四章 後漢の哲學者

この時代には訓詁が盛んで、哲學は衰へた。班彪は歴史家で、一種の史論たる『王命論』を作つた。班固は『漢書』を撰つた外に『白虎通』を監集した。この書は當時の一般思想を知るに便利である。内容を略述すれば、五行の氣、六律の氣の存在を説き、人間は五臟六腑を有せるより五性六情を具ふべしと論じてある。左に王充・牟子の哲學説を略述しよう。

一、王充 王充は『論衡』を著して一元氣を主張した。この一元氣は支那古代より存在したものである。

一元氣 氣を假定し、氣の多少によつて人間の運命を異にするものである、従つて運命は先天的に定まれるものと信じた。

骨相法 彼は骨相法を説いた。人間の形態も亦氣に従つて作られるとなし、形態と氣とは相關係し、従つて運命とも關係するとなした。彼は又一面に於て鬼神を信じなかつた。鬼神は畢竟自己の觀念に外ならないと論じてゐる。

著書『論衡』中の刺孟は孟子を攻撃し、問孔は孔子を批評したものである。

二、牟子 牟子は漢の大尉で名は融といふ。儒佛論を立てた。著書『所理惑論』は佛教の爲に大に辯護したものである。即佛教を以て廣大無限の教理となし、釋迦を信じて無上至尊となしたが、惜しい哉所論は淺薄である。

三、前後漢時代思想界の結論 兩漢時代を通じて哲學は不振であつて、哲學思想として注目すべきものはない。先秦時代に於ては學者は即政治學であつたが、この時代では兩者は明かに分立して、學者は單に文教に携るもの、政治家は單に天下を治む

るものと區別せられた。この時代には、先秦時代の典籍蒐集に多大の精力を費すの餘義なき爲、文學・哲學共に訓詁方面に力を注ぎ、唯文字の排列、字句の整正等に努めた爲、精神上に、何等の一貫思想を持つてゐなかつた。これが兩漢數百年間を通じての一般潮流である。

第五章 三國及六朝の思想界概観

一、概説 この時代は政治亂れ、思想も亦混沌を極めた。然して厭世思想蔓延した。この間佛教の弘通は唐代にかけて最發達し、道教も亦勢力盛であつた。

道德及政治の混亂は惹いて社會秩序の混亂となり、あらゆる惡徳の屢々演ぜらるゝあり、爲に清談者流の輩出を見るに至つたのである。當代の學者の重なるものは王弼・何晏がある。何れも儒者で老莊學を修め、盛に虛無主義を唱へ、六經を以て聖人の糟粕であると論じた。傅玄はこの潮流に逆つて斷然聖人の道を以て任じ、

『傅子』一卷を著はした。所論は頗正しい。斐文頗は西晋に仕へて功のあつたものである。『崇有論』を著はして虚無論に反對した。左に抱朴子の説を略述する。

二、抱朴子 抱朴子は神秘哲學論者である。根柢を老子におき、一元を假定して玄と名づけた。彼は神仙家の流を追つて長生、昇天の可能を論じて神秘説をなした。即藥物によつて昇天をなし得ると論じた。彼の思想は當代の思想を代表したのと言つてよい。

第六章 三教調和の思想

一、調和思想 儒・佛・道の三教は相互に關係するに至つた。六朝時代の末葉に至つては調和したものが少なくない。唯、道家と佛家とは時に議論に於て衝突し、又朝廷に於て其の席次を争つた事さへある。

二、張融及其所説 彼は次の如き説を持してゐる。道と佛とは其極の寂然不動なる點

に到れば則一である。二者は時と場所とに依て其の發現の形式を異にせるのみであつて、所謂寂然不動とは一の實在であつて現象の背後にある佛教の法性と異なる所がないものである。と。

第七章 唐代哲學

一、總説 この時代、儒學は益々興隆に趨いたが、之に反して哲學は頗不振の状態に陥つた。この重なる原因は、『五經正義』の撰定・進士及第の弊風・試験法の不良等にある。併し、佛教は漸次勃興を來し新宗の起つたものも少なくない。この間、思想界に於ては韓愈・李翱の二人があつて、やゝ燭光を放てる觀がある計りである。

二、韓退之 「原道」を著はして道佛二教を排斥し、儒教以外に教義はないと主張した。又性と情とを論じて曰く「性とは生れながらにして既に存在してゐるものである。情とは物に接して生ずるものである」と。性に三品あり情に三品あることを述

べ一概に善惡の決定せられないことを論じてゐる。(八家文中、原道・原性二篇参照)
三、李翱 性は本體であつて、各人清明なるものであるが故に、聖人も凡人も異なる所がない。性は本體で情は現象である。即情は性の動であつて性を蔽ふものである。即ち兩者の關係は月と雲との如きものであつて、不善なる情は、性の邪なるものである故、今邪を去り以て本性に復するには至靜を以てするを肝要とすると論じた。これは佛教の影響を受けたもので、宋學の濫觴となしてゐる。

四、儒佛二教 此時代は實に佛教の隆盛を極めた時代である。唐朝三百年中の前期百年間には諸派成立し、後期二百年間は寧ろ圓融弘通の時代であつた。又道教に於ても、唐の天子は李氏であつたが爲同姓たる老子(李姓)を尙んで、道教は當時一種の宗教たる觀があつた。

佛教上に於て經典の翻譯、其他著作物が少なくなかつたに反して哲學界には、韓退之、李翱の二子のみで、他は見るに足るものはなかつた。唯詩文の隆盛は空前で、

又註疏の發達も眼覺ましいものがある。(支那文學史參照)

第三篇 近世哲學

はしがき 近世哲學は主として理性學である。此時代の哲學は最異彩ある部分で、甚深なる哲學と、面白き修養法とを發見することが出来るのである。

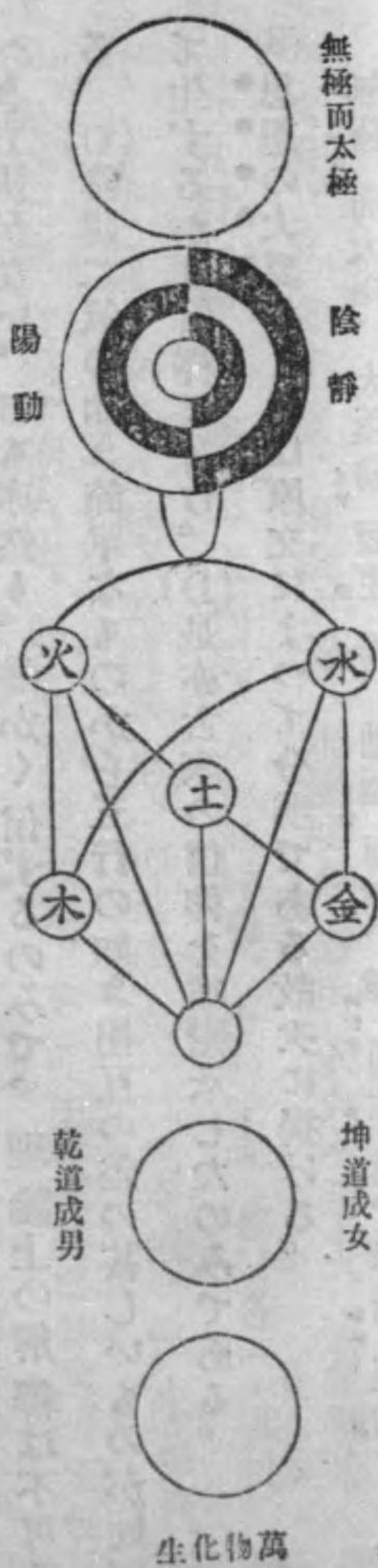
第一章 近世哲學と儒教

支那哲學思想は子思・孟子以來性の字を以て中心としたが宋代に至つては最熱心に此の説を推延敷衍して遂に性理學を生じたのである。性とは理をいひ二者は名を異にするが、内容は同一であつて、他語にて言へば心である。或は之を道ともいふ。故に理學・道學・心學なども言ふのである。又理と氣と兩者相對せしむる學者が多い爲、理氣の學(又は窮理學)ともいふ。この學の起つたのは佛教の影響が少なくない

が帝王の獎勵、訓詁學に對する反動等も與つて力ある。周子は道教の哲學を完成せんとした人で實に宋代哲學の淵源ともいふべき者である。

第二章 太極說

一、周子の太極圖 周惇實字は茂叔後惇頤と改めた。濂溪先生と稱したのは郷里にある溪流の名に因んだのである。胸中灑落で光風霽月の如くであつた。熙寧六年卒す。年五十七。著書に『太極圖說』『通書』二卷『雜著』二卷がある。「愛蓮說」も有名である。周子は近世哲學の鼻祖で、その著『太極圖說』は朱子によつて發揮せられ遂に支那道德哲學の中心となるに至つた。其文の一節に「五行一陰陽也、陰陽一太極也、太極本無極也」とある。本邦にては山崎闇齋の如きは此說を信じた。「太極圖說」は朱子以來有名で之に關する學者の著述は頗多い。「太極圖說」は次の圖を説明したものである。



二、太極圖の出所 太極圖は河南の道士陳希夷に出づと言ふことは疑ないらしい。とにかく周子の創作でない事は定論となつてゐる。即古來道家の用ゐたものを少しく變化せしめたものである。變化の順序は次の如し。



原圖は坎・離を對立せしめたもので古來道家の用ゐた所であつた。

三、太極圖說 その内容の一般及批評等を述べる。

(1) 其の學說 (A) 矛盾相對の觀念 (易・莊子等に發見せられる。即陰陽相互に因果をなすとの意。) (B) 天人感應の傳説 (支那古來より存在してゐる。) (C) 太極二氣五行の傳説 (陰陽二氣より五行及萬物を生ずといふ説。) (D) 人は萬物の靈なりとの傳説 (古來の傳説承繼)

(2) 右の批評 (A) 動の極といふも、無の極といふも、これが有ると信ずることは難い。猶動靜互に因をなすといふことも殆んど想像が出来ない。又理論からも之を解釋すべき方法がない。(B) も亦然り。唯かく信ずるのみで、理論上の解釋は不可能である。(C) 陰陽二氣の如き簡單なものから五行の如き相互の差の甚しいものが如何にして生ずるかは解釋に苦む。(D) 是亦古來の信仰を唯繼承したのみである。

(3) 思想の概要 これは原文によつて分明である故次に掲げる。

無極 而太極、太極動 而生陽、動極 而靜、靜 而生陰、靜極 復動、一動一靜、

互爲其根、分陰分陽、兩儀立焉、陽變陰合 而生水火木金土、五氣順布、四時行焉、五行一陽也、陰陽一太極也、太極無極也、五行之生也、各一其性、無極之真、二五之精、妙合而凝、乾道成男、坤道成女、二氣交感、化生萬物、萬物生生 而變化無窮焉、惟人也、得其秀 而最靈、形既生矣、神發知矣、五性感動 而善惡分、萬事出矣、聖人定之以中正仁義、而主靜立人極焉、故聖人與天地合其德、日月合其序、鬼神合其吉凶、君子脩之吉、小人悖之凶、故曰、立天之道、曰陰陽立地之道、曰柔與剛、立人之道、曰仁與義、又曰、原好反終、故知死生之說、大哉易也、斯其至矣、

(4) 修爲の工夫に二法がある。一を思といひ、動を慎む。他を寡慾といふ。

四、太極圖說の影響

太極圖及太極圖說は周子の歿後長く世に表はれなかつたが、朱子に至つて始めて之を開發し、是によつて以て其の哲學を建設したのである。其後朱子の潮流を汲むものは大抵太極說を信じて主張した。太極圖說の流行を助長した

ものは朱子の『近思錄』である。唯陸象山の學統を紹ぐ者は太極の文字を用ひない。

第三章 理氣二元論

一、程明道 (1)小傳 程顥字は伯淳、明道と諡す。河南の人。熙寧の初、御史に任ぜられ屢々上疏して事を論じたが、王安石と合はず、官を罷めて去つた。元豐八年、年五十四で卒した。語録『二程全書』の外、『明道文集』五卷、遺書、外書等の著書がある。彼は徳行家としても、政治家としても宋代一流の人物であつた。彼は儒家に生れ、周茂叔に學び、儒教を研究した後、老・佛二教に出入すること十年の久しきに及び再び還つて儒教を研究し、特に周易に於て根本原理を得たのであつて易の「生々之謂易、是天之所以爲道也」の思想と孔子の仁とを結合し、仁を以て萬物の本性とした。(2)學說の根本は理即氣、氣即理とて二者を一物とした二元論である。元來宋代の學問は理の一字に集注してゐる。この源をなしたものは實に程明

道その人である。(3)性論 心に人心、道心の二ありとなした。道心は元氣を一身の主宰として觀たに外ならない。故に道心は天理であり又道である。性が人慾に蔽はるゝ時は天徳を忘るるに至るものである。宇宙の元氣は即ち性にして仁である。故に性は道でなくてはならない。道外に性なく、性外に道がない。道を外にして性を尋ねると能はず、性を外にして道を尋ねることは出来ない。(4)修養論 (A)主一無適とは一を主として他に之を適かしめざること、心を集注して專一にすることを敬と稱す。(B)爲學とは人欲を防がんが爲に學問の必要を認めたのである。(C)内外を忘るる法は靜を以て心を動かさず理に隨由するのである。(D)誠仁とは仁を體認すること。

二、程伊川 (1)小傳 程頤字は正叔、明道の弟である。哲宗の時侍講となつた。彼の性は眞摯嚴格であつた。そして天子を補導し名聲世に布いた。後、東坡と衝突して洛・蜀二黨の爭議を惹き起し、罪を獲て涪州に貶謫せられたが、道を信ずること頗

厚く、少しも憂ふる色がなかつた。大觀元年卒す。年七十五。二程子の學が隆盛を來したのは主として伊川の力によつたのである。著書に『易傳』四卷、『文集』『經說』『遺書』『外言』『粹言』等がある。(2)學說の根本は二元論にある。曰く凡人は理と氣とより成る。理は本來善であるけれ共、氣に惡なるものがある故に人々相異なるを免れないと。宇宙間には精神と物體とがある。これは即ち理と氣とである。吾人が日常生活に於て物質以外に法則を考へつゝあるは理氣二元論の思想であると言つてよい。とにかく理氣二元論は吾人の思想界に於て一種の意味あることである。理氣二元及性論を左に表解する。



性論

性（理）……萬人一様なり||善……發動すれば||（未發—善なり。）
 已發—善・惡を生ず。

才（氣）……氣稟厚薄あり

善（清）
 不善（濁）

(3)修養論 寡欲（養氣）、窮理（事物に就いて理を窮む）、居敬（敬は主一無適の謂である。）の三事項を説いてゐる。

第四章 程門の後繼

- 一、謝上蔡（良佐）は明道の門人で、心を以て根本とした。即一元論者で、中心思想は仁（仁は即ち心、心は即天との説）である。又知行合一説をなした。
- 二、楊龜山（名は時、字は中立）伊川の説を受け、佛儒二教の比較をなした。又氣質の存在を認めてゐる。著書に『龜山語錄』『龜山集』がある。

- 三、王震澤（澤蘋）伊川並に龜山の門人、その學説は陸象山に傳はつた。
- 四、羅豫章は龜山に學んだが、其の學は極めて粗で、傳へて李延平に至つた。李延平の學は頗見るべきものがある。
- 五、李延平は龜山門下の秘訣として靜坐體認の必要を認めた。これは禪に近いものである。朱子は此思想を受けた。
- 六、右の外伊和靖・游酢等がある。

第五章 朱子學

- 一、朱子 (1)小傳 朱熹字は元晦又仲晦ともいひ、晦庵と號した。徽州婺源の人。儒・佛・道の三教を究め、二十四歳の時始めて李延平に見え終に伊川門下の學風を繼承したが、學は極めて該博で從來の學説吞吐せざるはない。慶元六年卒。歲七十一。著書頗多く、易本義、啓蒙、著卦考誤、詩集傳、大學・中庸章句、或問、論。

孟集註、太極圖通書、西銘解、楚辭集注辯證、韓文考異、論・孟集議、孟子指要、中庸輯略、考經刊誤、小學、近思錄、通鑑綱目、家禮、宋名臣言行錄、伊洛淵源錄、程氏遺書、文集百卷、語類八十卷等がある。就中『近思錄』は周子・橫渠・二程子の四家を尊信して著はしたもので、『朱子語類』は朱子の學説を述べたものである。(2)理氣二元論 これは朱子の哲學上の根本主義で、一切の萬象は理氣二元よりなるとなす。即伊川の説を繼承したものである。理とは形而上の實在で力學的の意味があり又根本的で無差別的である。氣とは形而下の質料で必然的の意味があり又附屬的で差別的である。朱子は理を以て周子の太極と同一物となした。即一切の萬物は普遍的であると。朱子の學説を繼承して大成せしものに朝鮮の李退溪がある。(3)心性論 心は氣に屬す、心は氣の清爽なるものである。又本然の性は理に屬し、氣質の性は氣に屬すとの説は伊川と同様である。

本然の性 || 理に屬す。……仁義禮智其他の法則具備す

氣質の性 || 氣に屬す。……清(賢) 形體あり、後に在り。
濁(愚)

兩者の關係は密接。

心活動せんとして仁強きものは獨り仁に流れ、禮強きものは禮に流れ易く其の中庸を得るは困難である。

道心……心の、理によつて刺激せられたもの。 || 道心惟微(物欲に蔽はれ易い)。
人心……心の、氣によつて刺激せられたもの。 || 人心惟危(過不及に流れ易い)。

(4) 仁說 理は生々の意を包含す。生々は即仁の意がある。仁は理の最根本的なる倫理作用である。又朱子は仁の活動を示す表を作成した。(5) 修養法 (A) 靜坐(延年の説を繼承したもので、靜坐を以て未發の中に體認せんとする。) (B) 格物窮理、(又格物致知ともいふ。客觀的なる一切現象に就て物理を研究すること。) (C) 讀書(最重んじた。その語は後世の標準となるものが多い。)

二、程朱學 根本は理氣二元論である。その要に曰く『宇宙の萬象は理氣二元より成る。理は即ち善にして人々同じ。之を本然の性となす。然るに人體の同じからざるが爲に氣質の性は人々相同じからず。氣質の性に善あり惡あり、聖人は本質の性氣質の性共に善なるものなり。衆人は本然の性は勿論善なれ共、氣質の性は必ずしも善ならず、故に氣質の性を矯めて本然の性をして光彩を發揮せしめざるべからず』と。
要するに心を正しうし、意を誠にして天理を體認せんとするに外ならないのである。

第六章 陸王學

一、總說 陸象山と王陽明とを合せて陸王といふ。陽明は象山の學派を繼承せるもので、その學説は相似たる點があるので合せて陸王學派といふのである。

二、陸象山 (1) 小傳 陸九淵、字は子靜、象山と號した。呂東萊に知られその紹介によ

つて淳熙二年四月朱子と信州鵝湖に會したが相互の意見は遂に一致しなかつた。晩年龍虎山の麓に庵を結び、その山が象に似てゐたので自ら象山翁と號した。紹熙三年、歳五十四を以つて卒した。著書に『象山集』『語錄』等がある。彼の學は明道に出でたもので一元論的立脚地に立つてゐる。(2)心即理 一元論の立脚地に立つて心を以て理となした。又人心・道心の別を廢して心は即善なりとした。これは明道の所謂理に外ならない。人より見れば則人心、道そのものより見れば即道心であつて、象山は我心即先天の理を發揮せんとした。(3)修養法 一元論の立脚地に立つて欲を去るを以て唯一の修養法とした。曰く『我六經を註するに非ず、六經皆我註脚』と、又曰く『他人は唯益さんことを務めるが、自家は反つて滅せんことを務む』と。朱子の格物致知を解して、客觀的なるものの理を知ることゝしない。即主觀的なる自己の、心を知る所以に外ならないとした。物とはこの心を指し、理も亦この心を指した。従つてその修養法は『之を思ふ』を以て最緊要事とした。(4)氣質 象山は

氣質の千差萬別なることを認めた。これは程子と同じく先天良心の外に性を假定したものである。唯その主とする所は先天良心論にあつて、一元論的立脚地に立つてとが實に彼の學風を簡易直截ならしめた所以である。

三、王陽明 心即理を藉り來つて知良知、知行合一等の術語を作つた。頗る直截簡明の學で主觀的・一元論である。物の字は陽明に在つては『意中の事』と解せられ、象山に於ては心と解せられた。陽明の小傳、學說等は後章明代の哲學に於て述べる故、此所には省畧する。

四、陸子の門人 (1)楊慈湖は絶體唯心論を唱へた。然し倫理的ではない。(2)舒廣平は象山を主とし張南軒に就いても問ふ所があつた。(3)袁繁齋は又東萊に就いて問ふ所があつた。

五、朱陸二派の折衝 信州鵝湖に於ける折衝の際の二家の主張を略述しやう。先づ二家の主義の異なる點を述べる。

朱子は學問を主とし、格物致知の説を持ち客觀的なる物の理を究むることを主張した。究理的である。

陸子は實行を主とし、格物究理は先天的なる心そのものを解決するにあるので、客觀的なる物の理を究むるのではないと論じた。議論尤も直截簡明である。

この主義を以つて左の如き討論を試みた。

朱子は陸子の教育法を甚簡であると論じた。

陸子は朱子の教育法を以て支離滅裂と駁した。

然し一家とも元より碩學たるの襟懷を持つてゐる。

朱子は陸子を以て天に恥ぢず地に恥ぢず人をして快活ならしむと言つた。

陸子は常に人に對つて晦翁も亦一意見又是一議論と言つた。

【參考】今朱陸二家の學說の同異點を挙げれば次の如し。

(A)同じき點 (1)先天良心論者なること。(2)理を力學的普遍的に見たること。(3)性理を學問の對境としたること。

(B)相異點

朱子

理氣二元論。

心と理とを分つ。

人心・道心を分つ。

學問より德行に入る。

洒掃應對より入る。

陸子

理氣合一論。

心即理。

心に二なし。

德行即學問。

精神を先にす。

第七章 朱陸以外の學者

一、獨立派 張南軒は朱子と同時に生れ朱子の講友であつたが、朱子に先だつて歿した。彼は義利の辨をなした。曰く「義とは爲にする所がなくしてなす行爲である。利とは爲にする所があつてなす行爲である」と。カント曰く「道徳的行爲は道徳とものとして實行するもので、非倫理的行爲とは他に目的があつてなすものである」

る」と。兩者相似の點があると言つてもよい。

呂東萊は朱子の講友であつた。張南軒と同様に特別な哲學的思想はない。とにかく二子共に二程子の學派である。○朱子學の反對者としては、陳龍川がある。彼は經濟の學を主張して甚しく性理學を反駁した。又葉水心は朱子學の空疏なることを攻撃した。

- 二、宋代哲學の結論 宋代は哲學勃興の時代で、其の源因は實に道・佛二教の勃興した後を享けて儒者が一種の哲學を得んと志し、「周易」により又は從來の學說によつて其の根本主義を立てたことに基づいてゐる。重なる學者及其の主義は、
- (1) 周茂叔は道家の説より出で、太極といふ一元論を假定した。
 - (2) 張橫渠は從來の氣の説によつて自家の説を成した。
 - (3) 邵康節は易に基づいてその説を立てた。
 - (4) 程明道は周易に立脚して一元氣論をなした。

- (5) 一元氣説 理氣二元論 || 朱子 … 理學の中心
心即理一元論 || 陸子
 - (6) 經濟的、政治的思潮 || 陳龍川・葉水心
- } 二者反對説。

第八章 元代の哲學

天下は遂に漢人種の有ではなかつたが、學問の潮流は依然として改まることなく朱陸の學は滔々として流れ來つて天下を併合しつゝある。

一、當代の朱子學派

(1) 許魯齋 名は衡、字は仲平、學者は稱して魯齋先生と言つた。河内の人で著書に「魯齋心法」「魯齋全集」等がある。彼は先天的良心論を立てた。そして天地自然の理に隨つて實行せんとしたのである。客觀的なる一事物を追うて理を究むることはしない。學統は朱子に出で、寧ろ陸子に近い。

(2) 劉靜修 名は因、字夢吉、雄州容城の人である。學者は稱して靜修先生といつた。著書に『靜修文集』がある。哲學說としてはあまり見るべきものもなす。

二、陸子學派 陸子學派の重なるものに陳・趙の二家がある。(1) 陳靜明名は宛、字は立大、世人稱して靜明先生と言つた。(2) 趙寶峯は陸子の門人で、名は階、字は子永といふ。著書に『遺文寶雲堂集』がある。彼の主張は三代の治復すべく、百家の道一にすべしと言ふにある。その學は靜坐を尙び、慈湖の餘風があると稱せられる。

三、折衷學派 折衷學派の主張は(1) 朱陸は調和し得べしと言ふ。兩極端の如くであるが理學者としては大體に於て一致することを見る。即ち兩家共に性善說である。相異點は

朱子 問學に重きを置き、究理的獨斷的の弊は免れない。

陸子 性善を基礎として徹頭徹尾善の發揮に努力してゐる。

大體から見ると陸子の說が當つてゐる。即ち長は陸子にある。右の如き見地から

(2) 理想的折衷說をなして曰く、『我本性を發揮し、不明なるものがあれば顧みて知るべく、(陸子說) 之によつて以て氣質の偏なるものを壓迫すべきである。(陸子說) 然れ共氣質を矯める爲には殊に注意を要する。(朱子說) 書を讀み善惡を判ずるは鏡に對して己を正すが如く、反省の機會として修養にとつては缺くべからざるものである。(朱子說) と。折衷派の重なる學者に吳・鄭の二家がある。

吳草廬 名は澄、崇仁の人である。その主張する所は、主觀の理は客觀の聞見によつて知るべく、客觀的に聞見するは主觀的に理を知る所以であると言ふにある。然らばその根柢如何。知力は即ち朱子の徳性であるからである。理氣を以て二元としない。理を以て氣中に在りと論じた。又理に清濁のあることを辨じ、氣質の異なるは之が爲であるとなし、之を矯めて善に歸せしむべしと説いた。草廬の學說は折衷學派の標本的のものである。

鄭師山 名は玉字は子美、著書に『周易纂注』がある。その主張する所は、陸

子と朱子とは其性質の異なる所より學說の同じからざることを述べてゐるが遂に一致すべしと言ふにある。又朱子の説は人に爲學の要を教へるもので、陸子の説は獨特の妙があると述べ二家の調和説をなした。然し二家共に弊のある所を認めてゐる。即ち陸子の説は空を談ずるに近く、朱子の學は墨を教へるに近いと論じた。

四、性理學要論

(1) 理 程明道に至つて一個の實在を示すこととなり、力學的活動的意味となつた。爾來理氣二元論者並に陸王學派に依つてこの意味に用ゐられた。次に理の字に就て略述しやう。

理は良心と一致する點もあり又異なる點もある。(イ)一致する點は善惡を判斷すること。道德を承知してゐること。活動的で吾人の中心なること。(ロ)相異の點は良心は經驗的の心であり、理は哲學的實在であることである。良心は道德に限られるが、理は哲學的實在として深き意味があり又物質界にも通するのである。

(2) 氣 氣の字は古代から種々の意味に用ゐられたが宋代に至つては専ら質料の意味に解釋せられた。唯、明代に至つて陽明は再び精神の意に解釋したのである。

(3) 理の異名 理には種々の意味がある。即、命・性・天・神・心・道・氣等である。本然の性と氣質の性とは理氣二元論に於ては理と氣と二者に分屬せられた。前者は善であつて後者は必ずしも善でないことは已に述べた通りである。

第九章 明代の哲學

明は漢人種を以て天下に王たりしものである。又哲學思想の尤も活潑なるを示した時代である。今、學派を分けず時代の順序によつてその要を述べよう。王陽明は明代に於てのみならず、支那全哲學史上に赫奕たる光彩を放つてゐるものであるからこれを中心として述べることにする。

一、陽明以前の哲學 (1) 吳康齋 名は與弼、字子傳、康齋と號した。彼は陽明の知行

合一説の端緒となつたものである。(2)婁一齋 名は諒、上饒の人である。彼も亦陽明の端を開いたものである。(3)陳白沙 名は獻幸、字は公甫、白沙里の人である。彼は初め學を吳康齋に學んだ。二程子の學と同じく先天的なる善を假定し之を以て絶對とし隨所に實行し心を動かすことなからんとした。系統は朱子學派に屬してゐる。

二、王陽明 (1)小傳 名は守仁、字は伯安、世人稱して陽明先生といふ。餘姚の人である。時の宰相に逆ひ遂に罪を得て龍場に貶謫された。宰相は之を殺さしめんとしたが危く毒刃を免れた。後諸方の賊を平げて恩命頻りに至る。嘉靖七年卒、年五十七。著書に『文集』及門人の記録に係る『傳習錄』がある。彼が一家の學を組織するに至つたのは實に龍場の謫地に在つて非常なる困厄に遭ひ、死生の間に出入した際にあるといふ。(2)學說 三綱領を以て根本とした。然し、その中、格物致知の意を悟り、知行合一の説をなしたのは實に正徳三年龍場なる謫地にあつた時に係るの

である。左に三綱領に就て略述する。(3)三綱領とは心即理、致良知、知行合一の三をいふ。三者は共に相關聯すること勿論であるが、その中心即理を根本として他の二綱領は之に對する工夫であると述べてゐる。

(4)心即理は先天的唯心論で、一元的立脚地に立ち、心即理の意を以て自家修養の根本命題としたものである。この點は陸子の説を繼承したものであつて、根本は即理の一字である。この根本主義があつて後に致良知の工夫があるとす。 (5)致良知 良知と心とは一物である。唯見る方面の異なるに隨つて其の名を異にしてゐる計りである。心即理であつて一方面を窺つたものを良知といふ。故に良知は發動する所に就て言ふのではなく其の本體に就て言ふのである。又明德の本體を以て良知となした。良知は元來明なるものであるが、時に欲の爲に覆はれることがあると論じた。(6)知行合一 良知の光を發揮すれば結果は知行合一ならざるを得ないと論ずるのは陽明の先天唯心論で、朱子の先知後行説とは反對である。さて真に知れば必ず

行に表はる。自己の良知を鍊磨すれば善惡の判断は自ら明瞭となり深く心に感ずるが故に必ず行に表はれざるを得ない。以上が三綱領の大要である。この外陽明の所説に就て略述しよう。

(7) 先天唯心論に於て良知は一切萬物の本體であるとした。(8) 理氣の二字を用ゐる點に於て明道の古に復した。左に圖解すれば、



(9) 欲望に對しては實在の資格を與ふことが出來ない。私心・私慾の如きものは本來の如き物ならざるが故に直に消滅するとした。之は禪學の影響である。(10) 天人一體論 陽明の哲學は先天唯心論で、良知は他方面より見れば仁であり、普遍的である。形態は人々異なるけれど仁は即ち天地萬物を通じて一體なるものであつて、爲に

個人はその精神を無限に廣からしめ得るとなした。(11) 個人の區別の生ずる所以は、性に就て性・質・情・蔽の四方面即ちこの四種の屬性がある爲であると論じた。

(12) 修養法に就いて述べて曰く「方法は致良知・格物・坐禪等がよろしい。又善とする所は之を好み、惡とする所は之を惡み、そのまゝ之を實行するにある。」と。(13) 四句訣とは(一)無善無惡心之體、(二)有善有惡意之動、(三)知善知惡是良知、(四)爲善去惡是格物、といふ四句で、一種の修養法を述べたものである。

以上陽明の所説を略述したが要するに陽明は本然・氣質の區別は之を口にせず厭く迄も之を一元的に解釋せんとしたのである。後世この學は單に陽明學と稱せられる。門人頗る多く當時より已に天下を風靡した。又は陸王の學とも稱せられる。

第十章 陽明以後の哲學

陽明當時陽明に反對したものに羅整庵があつた。彼は氣一元論者であつて、この説

は本邦の益軒・仁齋等と同じである。

陽明以後は支那の哲學は殆んど見るに足りない。清朝に入つては考證學起つて哲學と目すべきものはない。

清代には春秋公羊學と稱するものが起つた。これは康有爲によつて大成されたものである。然して民主的傾向の解釋をなしてゐる。この外譚嗣同は三教一致を論じ仁學を主張した。

公羊學に就ては宇野博士の「支那哲學史講話」を参照されたい。

以上を以て支那哲學史綱を終る。

支那哲學史綱 完

第五卷 附録

受験の實際

第一章 豫備試験

豫備試験では漢文科受験者は漢文の外、國語も受験せねばならぬことは第一卷に述べてある。又問題の範圍も研究方法も併せて詳細に説いた筈である。猶、小學校本科正教員か中等教員の某科の免許狀を所持せぬものは、國民道德及教育大意を併せて受験せねばならぬことも述べておいた。國民道德及教育大意の問題の程度は別項試験問題集中に掲げておいたから一覽されればほゞ見當がつくことと思ふ。のみならず、合格程度を標準として編まれた參考書も出版されてあること故これに依つて研究される

と勞の少い割合に効果を多く收められる事になる。その参考書は左の二書で十分であらうから就て熟讀されんことをお勧めする。

文_檢用國民道德要領 明治教育社編纂

大同館發行

文_檢受験用教育大意 編者同前

發行所同前

右の内「文_檢受験用國民道德要領」の方には受験の手續、規則、願書書式及其注意等が附載されてあるから、初めて受験される方は是非一覽されたいと思ふ。

さて願書の提出期はその都度官報に掲載される外、重なる新聞にも廣告される。又受験委員の氏名も前以て官報に發表されることが例になつてゐる。願書は地方廳に差出し、豫備試験はその地力で受験するのが普通であるが、地方の者が東京に願書を差出して東京で受験することも、その他の地方で受験することも出来るのである。受験の際はその前日迄に出頭して届出で、注意書等を受取ることが正式である。受験の結果は受験後一二ヶ月には官報に發表される。

第二章 本試験

本試験には漢文科受験者は、勿論國語科を受験する必要がない。然して豫備試験と異なる所は、本試験には筆記試験の外、口述試験があることである。筆記試験が済めば數日にして文部省の門前に筆記試験の合格者氏名が掲示される。これは貼出しの掲示である故とにかく文部省の門前迄出頭して確めなければならぬ。それ故東京附近の受験者はその掲示の如何を友人などに托して一旦歸郷して通知を待つことが出来るが、往復日數の數日を超過する遠隔地方の受験者は是非共東京に滞留する外はない。かくて筆記試験に合格すればいよいよ口述試験を受けねばならぬ。いや、口述受験の資格を得ることになる。口述試験の問題は筆記試験と大差はないが、試験官と差し向ひで問答をするのだからその範圍は時に意外の邊に迄擴大せられ、うっかり口を這らせると飛んだ失敗を招くことになる。だから知つてゐる範圍の事は大に述べ、記憶の確でない

いものはなるべく控目に答へることが必要である。さりとてあまり控へ目も損であるし、餘り吹き過ぎると過ぎたるは猶及ばざるが如しで失敗は同様に歸着する。口述の試験中に教授法といふ科目があるがこれは教科中の、所謂教授法ではなく頗る簡単なものである。とにかく膝詰めの追究には大抵辟易するものであるが知らない事を知つた振りをすることは大の禁物である。これは教へを請ふ積りでかゝれば間違はない。口述試験の際には解釋以外、文學史、哲學史等の學力をも試みられるから十分記憶して時に應じて正確に答へることが肝要である。猶この外常識の程度を試験せられる故東洋歴史及支那地理の大略は豫め自家藥籠中のものとなしておかなくてはならない。受験の實際はよく教育雜誌等に時々掲載されて承知の事と思ふから省略する。

第三章 参考書一覽

一、設問に關するもの。(定價は或は多少相違あるべし。)

文檢受験用國民道德要領	二、〇〇	明治教育社	大同館
文檢受験用教育大意	二、三〇	同上	同上
支那哲學史講話	二、五〇	宇野哲人	同上
支那哲學の研究	二、五〇	同上	同上
漢文學概論講話	五、〇〇	鹽谷 温	雄辯社
支那文學史綱	二、八〇	兒島猷吉郎	富山房
漢文典(正續二冊)	一、五〇宛	同上	同上
支那文典	二、五〇	廣池千九郎	早大出版部
馬氏文通	一、八〇	馬建忠	文求堂
操觚字訣	二、五〇	伊藤東涯	須原屋
漢籍解題	三、〇〇	桂湖村	明治書院
支那人名辭書	七、〇〇	難波・早川	吉川弘文館

二、講讀に關するもの

少年漢文叢書 二十七冊	(古文眞實を除く外文部指示本は全部網羅してある。講義最平易明瞭)	興文社
漢文大系 二十二冊		富山房

漢文科受験者の爲に

四七二

- (1) 四書 (2) 古文眞寶後集・唐詩選・三體詩 (3) 唐宋八家文 (5) 十八史略・小學・
- 孝經・弟子職 (6) 史記列傳 (8) 韓非子 (9) 老子・莊子 (10) 春秋左氏命義
- (12) 詩經・書經 (13) 列子・武經七書 (14) 墨子 (15) 荀子 (16) 易經・傳習錄 (17) 禮記・禮
- 記圖 (18) 文章軌範・古詩賞析 (22) 楚辭・近思錄

支那時文軌範

〇、八〇

青柳篤恒

博文館

支那時文講義全集

山田勝治

自強館書院

文檢受験用四書研究

二、〇〇

教育學術會

大同館

四書講義 大學

二、〇〇

宇野哲人

同上

四書講義 中庸

二、五〇

同上

同上

以下白文練習用のものを掲ぐれば次の如し。

文章 眞訣

〇、七五

菊池三九郎

早大出版部

漢文 綱要

〇、六〇

同上

同上

大學漢文文章必讀

〇、六五

松平・牧野

同上

大學漢文詩賦必讀

〇、四五

同上

同上

三、雜

作詩 活法 (正續)

各一、〇〇

土居香園

博文館

大字典 (辭書)

七、〇〇

上田博士外五名

啓成社

縮刷大字典

四、三〇

同上

同上

故事成語大辭典

四、〇〇

簡野道明

明治書院

國語に関するものは拙著

「文檢國語科受験者のために」(大同館發行)を参照されたい。

第四章 試験問題集

最初に大正十年度の豫備試験から掲げて見よう

一、國民道德要領

- 一、教育に關する勅語中の『天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ』の意義を説明し、且之を實行する道を述べよ。
- 二、忠孝一致の理を説明せよ。
- 三、國民道德の見地より地方自治の精神を説明せよ。
- 四、輿論の意義を説明し且之に對する心得を述べよ。(右三時間)

附 録

四七三

二、教育大意

- 一、個性の意義を明かにし、教育上の注意に及べ。
- 二、形式的陶冶の可否を論じ、教授上の注意に及べ。
- 三、中等學校に於ける自治的訓練の適切なる方法を述べよ。

(右二時間)

三、國語漢文科

設問 (第一日の分)

- 一、左の文の誤を正し其の理由を略述せよ。
口は食物の入る關門にして之を掩う唇堅き齒柔き舌等はいはゆる發音機關なり。吾人は之によりて自在に思想を語ることを得る。言語は思想を通ずる大切なるものなれども妄に用ゆれば不測の禍を招くことあり。
- 二、左の動詞助動詞の活用を示せ。
肥 塔 支 率 戀 恨 らる ぬ べし まじ
- 三、左の名稱を説明せよ。
今様 落首 俳諧 物名 歌枕
- 四、克己復禮の意義を述べよ。

五、司馬遷班固に就いて知れる所を記せ。

作文 (文體隨意)

わが愛讀の書

復文

- (イ) 敢て後れたるにあらざるなり。馬進まざればなり。(八字)
- (ロ) 人能く道を弘む。道人を弘むるにあらざる。(八字)
- (ハ) 天地の道は一言にして盡すべきなり。(十字)

非敢後也 馬不進也
人能弘道 道非弘人

天地之道一言而盡也
(設問・作文・復文を通じて四時間)

國語解釋 (以下第二日の分)

- 一、左の文を解釋せよ。
人のものを問ひたるに知らずしもあらじありのまゝにいはむはをこがましとにや心まどはすやうに返事したるよからぬ事なり知りたる事もなほさだかと思ひてや問ふらむ又まことに知らぬ人もなか無からむうららかに言ひきかせたらむはおとなしく聞えなまし人はいまだ聞き及ばぬ事をわが知りたるまゝにさてもその人の事にあさましなどばかり言ひやりたればいかなる事のあるにかと推し返し問ひにやるこそころづきなけれ世に

ふりぬる事もおのづから聞きもらすこともあればおぼつかかなからぬやうに告げやりたらむ悪しかるべきこと
かはかやうの事はものなれぬ人のあることなり (徒然草)

二、左の文の要旨を挙げて簡単に説明せよ。

無限に自分は生を渴望する。自分は人生に興味を失ひたく無い。人生の諸現象に興味を失つた人間には至上の
藝術も何も語らず何も示すまい。自然も彼等には冷たく人も彼等には胸を閉ぢるだらう。いかにその人の生涯
は寂しく狭苦しく冷たく過ぎるだらう。自分はさういふ人を多く見る。希望も愛も要求も無く老衰してゆく人
を。彼等の行手には只地と暗黒との深淵があるのみ。ああ哀れな人々よ。ああこれ等の此世を捨て去る人に
も今一度足を停めさせてこの人生をふり返らせそこに無限に盡きない生の豊かな恵を味はせ感じさせるのは詩
人の力ではなからうか。 (現代詩人選集)

(注意) 國語解釋、漢文解釋を通じて四時間とす。

漢文讀方及解釋

子曰鄙夫可與事君也與哉其未得之也患得之既得之患失之苟患失之無所不至矣 (論語)

右本紙に句讀點送假名を附し別紙に解釋すべし。

二

士窮不失義達不離道窮不失義故士得己焉達不離道故臣不失望焉古之人得志澤加於民不得志修見於世窮則獨善其身
達則兼善天下 (孟子) 右本紙に句讀點送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

三

後趙石勒稱天王尋稱帝晉大饗群臣問曰朕可方古何主或曰過於漢高勅笑曰人豈不自知卿言太過若遇高帝當北面事之
與韓彭比肩耳若遇光武當並驅中原未知鹿死誰乎「大丈夫行事當礪落如日月皎然不効曹孟德司馬仲達欺人孤兒
寡婦狐媚以取天下也」 (十八史略) 右本紙に句讀點反點送假名を附し括弧内の文を別紙に解釋すべし。

四

鳳皇臺上鳳皇遊鳳去臺空江自流吳宮花草埋幽徑晉代衣冠成古丘三山半落青天外二水中分白鷺洲總爲浮雲能蔽日長
安不見使人愁 (李白登金陵鳳皇臺) 右本紙に句讀點送假名を附し別紙に解釋すべし。

大正十年度本試験問題 (その一、筆記試験問題)

漢文科

一、讀方及解釋

懷公命無從亡人 (重耳) 期期而不至無救狐突之子毛及偃從重耳在秦弗召冬懷公執狐突曰子來則免對曰子之能仕父

附錄

教之忠古之制也策名委質貳乃辟也今臣之子名重耳有年數矣若又召之教之貳也父教子貳何以事君刑之不濫君之明也臣之願也淫刑以逞誰則無罪臣聞命矣乃殺之（左傳僖公二十三年）

注意（一）本紙に句讀點返點送假名を施し別紙に解釋を書せ。
（二）讀方解釋設問作文を通じて四時三十分とす。

二、讀方及解釋

客有教燕王爲不死之道者王使人學之所使學者未及學而客死王大怒誅之王不知客之欺已而誅學者之晚也夫信不然之物而誅無罪之臣不察之患也且人所急無如其身不能自使其無死安能使王長生哉（韓非子外儲說）

三、讀方

（解釋を要せず、句讀、返點、送假名のみ）

日本内田外相在國會發表對中國外交方針則爲滿口仁義道德之宣言如左

帝國對於鄰邦之中國勿論毫無領土野心的野心凡有形無形有碍中國國民福之何等行動皆所不爲惟恪守從前屢次聲明尊重中國之獨立與領土保全商工業機會均等門戶開放之主義使中日兩國成永遠且眞實之親善關係此帝國之夙志也因此歐洲講和會議帝國以公正友好之精神處置與中國關係諸問題實有最深之觀念（中日交涉史）

四、設問

- 一、周敦頤の太極說に就いて知れる所を記せ。
- 二、唐代古文復興の概要を記せ。

五、作文（漢文）

士不可以不弘毅說（字數三百字以内）

（その二、口述試験問題）

口述試験は受験者の数によつて二組乃至三組に分つて行ふものである。之は第一日に、抽籤により行ひ受験の期日を定め、當日の受験者は復數組に分れて各別の室に入つて行ふのである。最初別室の控所にあつて十分間位問題の下調べを許される。やがて給仕の案内に従つて試験室に入ると大抵は椅子に着くことを命ぜられ、數名の試験委員から交互に出問されるのである。大正十年度の問題を左に掲げる。

第一日の分

劉備三往、乃得見諸葛亮問策、亮曰、曹操擁百萬之衆、挾天子、令諸侯、此誠不可與爭鋒、孫權據有江東、國險而民附、可與爲援、而不可圖、荊州用武之國、益州險塞、沃野千里、天府之土、若跨有荆益、保其巖阻、天下有變荊州之軍向宛洛、益州之衆出秦川、孰不箠食壺漿以迎將軍乎、備曰、善、與亮情好曰密、曰孤之有孔明、猶魚之有水也、

注意 此問題を教材として左の事項に關し如何なる點を生徒に指示注意すべきかを問ふものとす。
（一）要旨、（二）語釋、（三）文法、（四）修身上、

第二日の分

附 錄

趙王歸、以相如爲上卿、位在廉頗右、頗曰、我爲趙將、有攻城野戰之功、相如素賤人、徒以口舌居我上、吾產爲之下、我見相如、必辱之、

相如聞之、每朝常稱病、不欲與爭列、出望見輒引車避匿、其舍人皆以爲恥、相如曰、夫以秦之威、相如廷叱之、辱其群臣、相如雖驚、獨恐廉將軍哉、顧念強秦不敢兵於趙者、徒以吾兩人在也、今兩虎共闘、其勢其不俱生、吾所以此者、先國家之急、而後私讐也、頗聞之、肉袒負荊、詣門謝罪、遂爲刎頸之交、（注意は第一日の分と同じ）

第三日の分

司馬光在位、遼人夏人來、必問光起居、而遼人教其邊吏曰、中國相司馬矣、幼母生事開邊隙、及薨、京師民罷市、畫其像、印鬻之、畫工有致富者、及葬、四方來會者、哭之如哭其親戚、光嘗語晁各曰、吾無過人、但平生所爲、未嘗有不可對人言者耳、劉安世問光一言可以終身行之者、光曰、其誠乎、安世問其所從人、曰、自不妄語人、（注意は第一日の分と同じ）

〔參考〕 大正十年度、國語科試験問題 筆記試験

解釋 (一)源氏物語須磨の一節、(清による浪のかつかへる見たまひてうらやましくもとうち踊じたまへるさる世のふる事なれども珍らしく聞きなされ……………昔の御心のすさびおぼし出づ) (二)萬葉集志貴親王薨時作歌。

設問 (一)文學上より平家物語を評論せよ (二)左の文を文章法上より解剖せよ。生物進化の事實なることは已

に十九世紀の後半の研究によつて全く確實となつたから今世紀に入つてからは其理を應用して直接に人間社會を利することを計畫する人が追々と出來た。

作文 (文語文) わが希望

注意 解釋設問作文を通じて四時三十分間とす。

同上 口述試験

第一日 本居宣長の許にはじめて贈る。加藤千蔭(全文略)

第二日 隅田川に舟を泛べて遊ぶ。加茂眞淵(全文略)

第三日 手習に物に書きつけたる。加茂眞淵(全文略)

大正十一年度 豫備試験問題

一、國民道德要領

- 一、教育に關する勅語中『徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ』の意義を説明し且之に就きて感ずる所を述べよ。
- 二、信義の重んずべき理由を述べよ。
- 三、我國民道德の特質を論ぜよ。

四、現代思想の主なるものを舉げて之を批評せよ。(右 三時間)

二、教育大意

一、教育の目的に關する諸説を舉げて之を論評せよ。

二、左の意義を説明せよ。

直觀、類似聯合、教授の様式、

三、教授と訓練との關係を述べよ。(右 二時間)

三、國語科漢文科

設問

(第一日の分)

一、左の文中の動詞形容詞助動詞を抽出して其の活用を法(段)に當て、表示せよ。

其の子家繼は父には似ず大剛の者にて敵數多撃取つて引きけるが父が馬は射られて伏しぬ主はなし生捕られにけりと思ひて無念なれば只一人取つて返し多くの敵を斬伏せて或兵と引組んで落ち刺違へて死しけり。

二、左の人々の年代を示しその著作物の名を知れる限り舉げよ。

一條兼良、尾崎紅葉、紀貫之、加茂真淵、北村季吟、

三、左の名稱に就いて知れる所を記せ。

(イ)道家 名家 法家 (ロ)四六文

作文

わが勉學の狀況を友人に知らず文(口語文)

復文

有所不足 敢不勉 而終不取焉

(イ) 足らざる所あり、敢て勉めずんばならず、餘あり、敢て盡さず。十三字(中庸)

(ロ) 苟も其の養を得れば、物として長ぜざるなく、苟も其の養を失へば、物として消せざるなし、十六字(孟子)

(ハ) 與に言ふべくして之と言はざれば、人を失ふ、與に言ふべからずして之を言へば、言を失ふ。

(設問作文を通じて四時間とす。)

國語解釋

(第二日の分)

一、左の文を解釋せよ。

さしたる事なくて人のがり行くはよからぬ事なり用ありて行きたりともその事はてなば疾く歸るべし久しくゐたるいとむつかし人と對ひたれば詞おほく身もくたびれ心もしづかならず萬の事はりて時をうつす互のため益なし厭はしげにいはむもわるし心づきなき事あらむをりはなかなかその由をいひてむおなじ心に對はまほしく思はむ人のつれづれにて今しばし今日は心靜かになどいはむはこの限にはあらざるべし阮籍が青き眼誰もあるべきことなりその事となきに人の來りてのどかに物語して歸りぬるとよしまた文も久しく聞えさせねばなどばかり言ひおこせたるいと嬉し(徒然草)

二、左の文の要旨を擧げて簡単に説明せよ。

藝術の尊いところは、絶えず魂を深め行くところにある、絶えず人間性そのものを大きくして行くところにある。魂の更に深いすがたが発見せられない時、私たちの藝術に倦怠が生れる。魂の更に新しい力が創造せられない時、藝術が通俗的なものとなつて来る。藝術家にとつて最も恐ろしいことは、世間の要求を知らないことであらう。自分で自分の魂のすがたを見失ふことである。魂を更に深くして行く創造の苦惱を忘れる事である。藝術はいつも藝術家自身の魂のために存在するものでなければならぬ。新しい藝術を造り出すといふことは新しい魂を見出すといふことである。更に新しい魂を、更に新しい人間性を創造することである。

(小鳥の來る日)

注意 國語解釋漢文讀方及解釋を通じて四時間とす。

漢文讀方及解釋

子曰舜其大知也與舜好問而好察通言隱惡而揚善執其兩端用其中於民其斯以爲舜乎 (中庸)

顏淵喟然歎曰仰之彌高鑽之彌堅瞻之在前忽焉在後夫子循循然善誘人博我以文約我以禮欲罷不能既竭吾才如有所立卓爾雖欲從之末由也已 (論語)

三

夫沿河而下苟下止雖有遲疾必至於海如不得其道也雖疾不止終莫幸而至焉故學者必慎其所道道於楊墨老莊佛之學而欲之聖人之道猶航斷港絕潢以望至於海也故求觀聖人之道必自孟子始今頃之所由既幾於道如又得其船與楫知沿而不止嗚呼其可量也哉 (韓愈 送王頃序)

四

何有綈袍贈應憐范叔寒不知天下士猶作布衣看 (高適 詠史)
青海長雲暗雪山孤城遙望玉門關黃沙百戰穿金甲不破樓蘭終不還 (王昌齡 從軍行)
(以上四問題共句讀返點送假名を附し別紙に解釋を記すべし。)

大正十一年度 本試験問題

一、國語科 (その一 筆記試験問題)

解釋

一、うへの御つぼねのみすのまへにて殿上人日ひと日琴ふえふきあそびくらしてまかでわかるほどまだからしをまらぬにおほとなぶらをさし出でたればとのあきたるがあらはなれば琵琶の御琴をたごまにもたせたま

What is it? I think perhaps it is

へりくれなるの御衣のいふもよのつねなるうちき又はりたるもあまた奉りていとくろくつややかなる御琵琶に御衣の袖をうちかけてとらへさせたまへるめでたきにそばより御ひたひのほどしるくげざやかにてわづかに見えさせたまへるはたとふべきかたなくめでたしちかくるよりたまへる人にさしよりてなかばかくしたりけむもえかうはあらざりけむかしそれはただ人にこそありけめといふをききてみちもなきをわりなくわけいりて啓すればわらはせたまひてわれは知りたりやとなむおほせらるとつたふるもをかし(枕草子)

二、あまとぶやかるのみちはわぎもこがさとにしあればねもごろにみまくほしけどやまずゆかばひとめをおほみまねくゆかばひとしりぬべみさねかづらのちもあはむとおほぶねのおもひたのみてかざるひのいはがきぶちのこもりのみこひつつあるにわたるひのくれぬるがごとてつきのくもがくるとおきつものなびきしいもみぢばのすぎでいにしとたまづさのつかひのいへばあづさゆみおとにききていはむすべせむすべしらにおとのみをききてありえねばわがこふるちへのひとへもなぐさもるころもあれやとわぎもこがやまずいでみしかるのいちにわがたちきけばたまだすきうねびのやまになくとりのおともきこえずたまぼこのみちゆくひともしりだにてしゆかねはすべをなみいもがなよびてそでぞふりつる。

(萬葉集柿本朝臣麻呂妻死之後泣血哀慟作歌)

設問

一、源氏物語と枕草子とを比較評論せよ。

二、左の文を文章法上より解剖せよ。

未成年者が其ノ飲用ニ供スル目的ヲ以テ所有シ又ハ所持スル酒類及其ノ器具ハ行政ノ處分ヲ以テ之ヲ沒收シ又ハ廢棄其ノ他ノ必要ナル處置ヲ爲サシムルコトヲ得。

作文 (文語體)

月夜

(その二) 口答試験問題

(第一日/分)

かの島には春來てもなほ浦風さえて浪あらく渚の氷もとけがたき世のけしきにいとどおぼしむすぼる事つきせずかすかに心ほそき御すまひに年さへ隔りぬるとあさましくおささる心ならずもまどろませたまへる曉方夢うつつともわからぬほどに後宇多院ありしながらの御面影さやかに見えたまひ聞えしらせたまふことおほかりけりうちおどろきて夢なりけりとおほすほどいはむ方なくなごりかなし御涙もせきあへずさめざらましとおほすもかひなし源氏の大將須磨の浦にて父御門見奉りけむ夢のこちしたまふもいとあはれにたのもしういよいよ御心強さまさりてかの新發意が御迎のやうなる釣舟もたよりいできなむやと待たるこちしたまふに大塔の宮よりもあまびとのたよりにつけて聞えたまふこと絶えず。

(第二日ノ分)

この野より出でさせたまひて武庫川神崎難波住吉など過ぎさせたまふとて御心のうちにおぼすぢあるべし山田の宮のわたりにても御輿とどめて拜み奉らせたまふあしやの里すずめの松原布引の瀧など御覽じやらるるもふるき御幸ども思しいでらる生田の森をばとはで過ぎさせたまひぬめり湊川の宿につかせたまへるに中務宮はこやの宿におはしますほど間近く聞き奉らせたまふもいみじうあはれに悲し宮

いとせめてうき人やりの道ながら

同じとまりと聞くぞうれしき

(第三日ノ分)

安福殿の釣殿にしやうじたてゝ東面におはします上達部は簀子の勾欄にせななおしあてつゝ殿上人は庭に候ひあへるもいとえんなり池の御船さしよせて左右の講師たかすけ爲冬のせらる御みきなどまゐるまもうるはしきことよりは艶になまめかし人々の歌いたくけしきばみてとみにも奉らずいと心もとなし照る月なみも曇りなき池のかとみにいはねどしるき秋のものなかはげにいとことなる空のけしきに月もかたぶきぬ明け方近うなりにけりへの御製

鐘の音もかたふく月にかこたれて

をしと思ふ夜はこよひなりけり

と講じあげたるほど景陽の鐘もひびきをそへたるをりからいみじうなむいづれもけしうはあらぬ歌ども多く聞えしかど御製の鐘の音にまされるはなかりしにや。

二、漢文科 (その一 筆記試験問題)

一、讀方及解釋

『析父謂子革吾子楚國之望也今與王言如響國其若之何子革曰摩厲以須王出吾刃將斬矣』王出復語左史倚相趨過王曰是良史也子善視之是能讀三墳五典八索九丘對曰臣嘗問焉穆王欲肆其心周行天下將皆必有車轍馬跡焉祭公謀父作祈招之詩以止王心王是以獲沒於祇宮問其水而不知也若問遠焉其能知之王曰子能乎對曰能『其詩曰祈招之惜惜式昭德音思我王度式如玉式如金形民之力而無醉飽之心王揖而入饋不食寢不寐數日不能自克以及於艱仲尼曰古也有志已復禮仁也信善哉楚靈王若能如是豈其辱於乾谿』(左傳昭公十二年)

注意 本紙に句讀點返點送假名を施し括弧内の部分を別紙に解釋すべし。

二、讀方及解釋

人皆寢則盲者不知皆默則暗者不知覺而使之視問而使之對則暗盲者窮矣不聽其言也則無術者不知不任其身也則不肖者不知聽其言而求其當任其身而責其功則無術不肖者窮矣夫欲得力士而聽其自言雖庸人與烏獲不可別也授之以鼎俎則罷健效矣故官職者能士之鼎俎也任之以事而愚智分矣(韓非子六反)

注意 本紙に句點返點送假名を施し別に解釋すべし。

三、讀方

據問島電訊二十八日午前四時許忽有馬賊襲擊頭道溝大肆搶掠當時槍彈如雨日本領事館亦被波及嗣有馬賊數人闖入日本領事館員竭力抵禦加之匪賊各處縱火黑烟濛濛天日爲暗日本領事館爲火所迫情況極形凄慘嗣子街之日本官署得報後立即遣派應援隊前往援救以期出館員于危難中

注意 本紙に句讀點返點送假名を施すべし。

四、設問

左ノ事項ニ就キテ知レル所ヲ記セヨ。

イ、王霸ノ別

ロ、江西詩派

五、作文 (漢文)

廉恥説 (三百字以内)

(その二) 口答試験問題

(第一日ノ分)

太宗嘗問侍臣創業守成孰難房玄齡曰草昧之初羣雄並起角力而後臣之創業難矣魏徵曰自古帝王莫不得之於艱難失之於安逸守成難矣上曰玄齡與吾共取天下出百死得一生故知創業之難徵與吾共安天下常恐驕奢生於富貴禍亂生於所忽故守成之難然創業之難往矣守成之難方與諸公慎之 (十八史略)

(第二日ノ分)

趙普爲人沈毅果斷以天下爲己任爲太祖所倚信專與謀議太祖問普曰吾欲息天下兵爲國家長久計其道何如普言唐季以來帝王數易由節鎮太重君弱臣強而已今莫若稍奪其權制其錢穀收其精兵則天下自安太祖從之 (十八史略)

(第三日ノ分)

南陽鄧禹杖策追劉秀及於鄴秀曰我得專封拜生遠來寧欲仕乎禹曰不願也但願明公威德加於四海禹得效其尺寸垂功名於竹帛耳更始常才帝王大業非所任明公莫如延攬英雄務悅民心立高祖之業救萬民之命天下不足定也 (十八史略)

附言 大正九年度以前の試験問題は、大正九年度以後の試験問題と併せて本書の姉

妹編「文檢參考用國語科受験者の爲に」中に採録せり。

餘言

文檢合格後、他の學科を研究して再度出願しようとするれば關係深い修身科、歴史科などを選ぶのが普通であり又得策でもあらうが、翻つて考量すれば、中等教員の免許状はたとひ何枚持つてゐようとも、猶且中等教員で、然も今日ではやつと奏任待遇―老齡に及んで退職する頃迄かゝつても教諭で奏任待遇の地位を贏ち得る位が關の山である。校長になることすら殆んど不可能であるから大抵前は見え透いてゐる。然しそれかと言つて小成に安んじて終うことは心ある士には到底出来ることではない。又終世後生大事と現職に嚙りづいてゐることも卑屈に陥らしめる計りで少しも發展の計とはならない。我々は希望に生きねばならぬ。向上に志を馳せねばならぬ。それには猶この一階段上の高等學校教員檢定試験受験も一法であらう。私は他の學科の中等教員檢定試験を出願するよりもこの方を以て一身上將來の得策と思ふ。のみならず何學科

もさうであらうが、國語科、漢文科は殊に文檢合格だけの學力では、十人中八九人位迄は大抵學力が十分でない。十二分の力を以てパスした人には(そんな人もあるかも知れないが、今後は益々そんな人は少なくなるだらう)言ふ必要もないが、大抵は合格後己が學力に顧みて確かなる自信を持てる人は幾人あるだらうか。恐らく慚愧として額に汗しないものはないことだらう。だから合格後一步一步の研究によつて大成の域に入るもので、單に合格の榮冠を贏ち得た丈で得々然たるものはやがて落伍者流の人となるか、それとも卑屈に生涯を終らねばならぬ事になる。我々は合格後、今迄の研究を基礎として少くとも數年間の研鑽を積む心懸が必要である。然らばその研究の歩を更に少しく擴めて百尺竿頭一步を進めることが如何に學究的態度であり且つ將來の得策であるかが分明することと思ふ。左に高等學校教員檢定試験に就て一言し、併せて、研究範圍を述べて見たいと思ふ。

中等教員免許狀受領者が更に研究の歩を進める爲に如何程の特典を與へられてある

かといへば、第一は大學入學の資格を與へられてあることである。有資格者は京都、東北等の大學には大抵選科に入學が出来る。卒業迄に高等學校程度の卒業試験を受験し合格すれば、卒業の際本科同様に學士の稱號を受けることも出来る。第二には高等學校教員檢定試験受験の資格を與へられてゐることである。大學入學もよいが、これには第一に學資の問題や妻子あるものは大抵在學中妻子の扶養に對する困難な問題に逢着するだらう。併し高等學校教員檢定試験ならば職に在つて傍ら勉學の結果受験するのであるから生活の問題に就いてもさしたる變化は起らない。そこで私は後者の方を選ぶことが得策であると思ふのである。

さて右の試験に關する諸規則注意等は悉しい事は大正九年九月十四日の官報によつて承知されたい。試験科目中外國語科を除くものは皆豫備試験の際中等學校卒業程度の外國語を課せられる。外國語は英・佛・獨語の中何れを選んでもよい。和文歐譯と歐文和譯の二題である。次に漢文科の問題範圍と參考書とを掲げる。これは大正九年

九月十四日の官報所載。

漢文科

(一)講讀 (二)作文(漢作文) (三)文法 (四)支那學術思想史 (五)支那文學史

參考書 四書、五經(詩・書・易・禮記・左傳)、老子、荀子、韓非子、史記、漢書、楚辭、文選、宋元學案、明儒學案、國朝漢學師承記、五朝詩別裁、古文辭類纂、續古文辭類纂、續古文辭類纂、馬氏爰通

〔註〕(1)(2)は清の黃宗義撰、學案は哲學史・儒學史の類。(3)は清の江藩撰、清朝學者の傳記である。(4)は清の沈德潛著。(5)は清の姚鼐撰、第三卷「支那文學史」清朝編及第二卷、「漢文學概論」文體論中に略述してある。(6)清の王先謙撰、(7)は清の黎庶昌撰、(8)は第三卷、清代編に略解題を試みてある。

右の(I)より(8)迄は和刻本はないこと、思ふ。文求堂に註文すれば上海あたりから取次いでくれる。又十三經本も入手せねば専門の研究はむづかしい。これも文求堂に註文

すればよい。紙質や印刷等の差異で數種あるから定價も區々であるが十五六圓から百二十圓位迄で入手が出来る。講讀の方の参考書は全部、第一卷、第二卷、第三卷に互つて比較的詳密に解題してあるから参照されたい。右の中、支那時文のない事は文檢と少々異つてゐるやうである。

國語科

- (一) 解釋 上古より現代に至る主なる文學書類、
- (二) 文法 各時代の語法變遷及口語法、
- (三) 作文 文語法、口語法、
- (四) 國文學史 上古より現代に至る國文學の發達變遷及現今の文藝思潮、
- (五) 言語學概論、
- (六) 文學概論、
- (七) 國史 神道の沿革及宗教思想の發達に關する觀察、
- (八) 國語の歴史
- (九) 國語の教學法

文檢 漢文科受験者のために 大尾

漢文學研究者のために

正價貳圓八拾錢

大正拾貳年參月拾六日印刷

大正拾貳年參月拾九日發行

著作者 石川 誠

發行者 東京市神田區表神保町七番地 坂本 眞三

印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 吉田 松次

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社 秀英舎第一工場



發行所

東京市神田區表神保町七番地 振替貯金口座東京八七貳番

大同館書店

東京高等師範 中村久四郎 先生 高橋與惣 先生 新著

第五版 文部省檢定 受驗用 東洋通史

菊判最上製美本全一冊紙數九百餘頁正價金四圓八拾錢郵稅二十錢

本書の組織は現今中等學校の教授細目を適宜配合して四編六拾五章に分ち著者多年の實地的經驗を基礎とせる獨創の排案に據り上下五千餘年に亘れる諸民族の盛衰興亡より政治・風俗・學術・文藝・宗教・制度の一切を網羅し東洋史實を盡く有機的連絡の下に最も平易正確懇切に通説せりそして從來の東洋史の最大缺點たる記述の無味乾燥及び繁雜に過ぎずば簡易に失せる缺點・地名人名の難讀・官職の難解等を補ひし外古今東西史學者の披瀝せる學說の種々なるものは努めて之を採録し一々出所出典を明示して研究者の便に資せり又文部省檢定試驗問題の第壹回より最近に至る迄の分を盡く明瞭に解答し之を本文の間に分載し以て受験者に一大秘庫を提供せり要するに本書は文檢受驗用の名を冠すと雖も一切の史實を通説せるは勿論古來日支兩國の關係殊に最近世東洋外交上の事件人物を詳説したれば實に中等教員小學教授參考及文檢受驗者の一大秘庫たるのみならず史學研究者世の讀者も亦座右に備へて大に裨益なかるべからず。

東京 大同館發行 神田

大 同 館 發 行 圖 書 目 録

市川一郎氏新著 (最も初學者に適する入門書)

三 版 最新認識論講義

本書は認識の根本問題に關する過去現在の學說を真に何人にも理解し得るよう巧妙簡明に講述せるものなり。一度本書を讀く時は哲學的論理的思索に無理解なる人士も將又既刊類書の難解に絶望せる人士も易々として真理探求の眞方法を會得するの歡喜を味ひ得るや疑なし篤學の士の愛讀を待つや切なり。

市川一郎氏新著 (現代教育者必讀の要書)

三 版 教育の基礎たる社會學

本書は米國碩學の近著に係る應用社會學の一なる教育的社會學に據り社會學の主要なる原理と此原理に立脚する教育說の社會學的解釋とを講述せるものである。過去の因襲教育が心理學に依り改訂せられたるが如く、行き詰れる現代の教育は是非社會學に依り改訂されなければならぬ。實に本書の説く廣大にして根本的なる教育說は狹隘なる天地に閉關せる今日の教育を廣闊豁朗なる曠野に誘導するものである愛國の士の必讀を要す。(文部省は勅令を以て社會教育課を新設す)

四六列洋裝 正價金 壹圓 五拾錢 送料四錢

四六列最上製全壹冊 四四拾餘頁挿入 正價 金貳圓

送料十二錢

大同館發行圖書目錄

早稻田大學講師 本間久雄氏新著 一忽三版

現代の思潮及文學

（四六判最上製美本 全壹冊四百餘頁 正價金貳圓參拾錢 送料金十二錢）

現代の民衆生活の立場から解説批評せし
文化問題二十講出づ

の人々にも充分興味ある暗示と啓蒙とを與へるであらう。

目次

- 第一章 社會改造運動と當來の文學……第二章 民衆藝術の意義及價值……第三章 ウイリアム・モリスの民衆藝術論……第四章 徳川時代に於ける民衆藝術の勃興……第五章 解法の詩人……第六章 人生派の批評と藝術派の批評……第七章 藝術の社會的價值……第八章 ボッサンケ氏の美學……第九章 グライプ・ベル氏の戦と藝術……第十章 國家主義と世界主義……第十一章 二つの愛國心……第十二章 現代とジャーナリズムの意義……第十三章 二種の平和論……第十四章 性的道德の傾向……第十五章 現代婦人と世界的不安……以下略す

小學校に是非一本を備ふ可き良書

▲教授用と檢定受験用とを兼備せる隨一の國史參考書
講國學院大學 師文學士岡部精一氏 高橋與惣氏共著

三 文部省檢定 大日本歴史 版 試験問題對照

●菊判クロース製最上美本 紙數九百五拾頁 全壹冊

六圓八拾錢 郵稅廿四錢

本書は各種○校の國史科教授の參考に供し兼て各種の受験準備に資せんが爲めに編纂せるものにして教授參考に供する方法としては現行文部省の中等學校及教小學校の授細目を基礎とし之れを適宜配合して編纂を分ち國史の本幹を形成せる事實を精細に通説し又古今史學家の發表せし新説の穩健なるものは努めて之れを採録せり。試験準備に資する方法としては第一回より第廿六回に至る文檢試験問題を發題者の要求を推究探尋して一々精密に解釋し盡く各章末に添附せり。加ふるに編者多年の経験と研究とを以て些の遺漏なきを期したれば諸學校に取りては繁簡適宜あらゆる重要史實を網羅して餘蘊なき最も完備せる國史參考書たるべく檢定受験者殊に小學校教員諸氏に取りては教授用と受験準備用とを兼備せる斯學隨一の羅針盤たるべし。

發行所

東京市神田區表神保町六番地 振替貯金口座東京八七貳番

大同館書店

東京帝國大學文科助教授 文學博士 宇野哲人先生新著

版四

四書講義 大學

菊判最上製美本
全壹册參百五拾頁
正價金貳圓
郵稅金十八錢

大學は儒教の目的を最も善く組織的に叙述せるものなりとは著者の創唱する所、此書は如上の見解によりて平易明晰に講述せるものにして冠するに大學要旨を以てし附するに索引及之と密接の關係ある幾多有益の研究を以てす。苟くも儒教の何物たるかを知らんと欲せば必ず此書を繰りて著者の圓熟せる講話を聞かざるべからず。

東京帝國大學文科助教授 文學博士 宇野哲人先生新著

版五

四書講義 中庸

菊判最上製美本
全壹册壹百八拾頁
正價貳圓五拾錢
郵稅十八錢

儒教の目的は大學に備はり、儒教の根本義は中庸に明かである。かくて學庸の二書は經となり緯となり。互に相待つて儒教の真相を傳ふ。著者は如上の見解を以て先に大學講義を著はし今亦中庸講義を著す。大學に由て既に儒教の目的を明かにせる大方の士は請ふ更に中庸に就いて儒教哲理の眞面目を了せよ。尙附錄教篇は皆直接間接に中庸の意義を明かにするものである。

東京 神田
大司館藏版

文檢受験者
必備の要書

明治教育社編輯部編纂

(賣行底止する所を知らず)

文檢
受験用

國民道德要領

四六判最上製美本
全壹册紙數五百頁
正價金貳圓
郵稅拾貳錢

第三版

文檢試験の規定が改正になつて各科の受験者に「國民道德要領」が課せらるゝことになつた。本書は是等の受験者の爲に出來たもので材料の選擇と云ひ記述の體裁と云ひ總て受験者に都合よく出來て居る。主として委員の説をとり之に數十大家の説を參考として掲げてあるから此の書を見れば國民道德の要領は最も手取早く會得せられる。且つ文章が平易であるから讀むに骨が折れず。近來類書中の白眉である。——(帝國教育社)——

明治教育社編輯部編纂

(好評激甚初版賣切増刷出來)

文檢
受験用

教育大意

四六判最上製美本
全壹册紙數五百頁
正價貳圓參拾錢
郵稅拾貳錢

好評 七版

本書は「國民道德要領」の姉妹編にして本社が特に合格者の秀才に執筆を依頼したるものなり。其特色は合格者の經驗を基礎として編述したるが内容豊富にして且つ受験者に都合よき様に記述したる事試験委員の説を隨所に擧げたる事問題解答を掲げ且つ類似問題を多く載せたる事文章の平易なる事等に在り。されば文檢教育科並に教育大意受験者は勿論各府縣小學校教員檢定受験者にとりても無二の好參考書なり。

大 同 館 發 行 圖 書 目 錄

教育學術會編纂 四六判最上製美本 正價金貳圓

好評九版

文檢教育勅語解義

熱狂的歡迎

郵十二錢

毎年の文檢國民道德要領試驗問題を見るに五問題中二問題は「教育勅語」「戊申詔書」の中より出さるゝを常とす。然るに我が學界には該科受檢用書としての國民道德原論に關するものは數種あるも「勅語」「詔書」の受檢用的に編纂せられたるもの一冊も無し。之れ受檢者中往々其の受くべき専門學科及び國民道德原論に於ては優良の成績を示しながら勅語詔書の解釋不十分なるによりて

國民道德要領受檢者 必備必讀の參考書

落第を見ることある所以なり。本書は實に之に鑑みて其の悲劇を未然に防がんと爲に既に弊館より出版せられたる「國民道德要領」の姉妹編として技に諸君に見ゆることとなりたるなり。隨て編纂の内容等は徹頭徹尾こゝに思ひを凝らして苟も本書を讀みし者にて勅語實踐道德の問題に對して一も解答し得ざることも無きやう努めたるや論無し。例へば或る事項を解くにも其の順序は(一)讀方(二)字義(三)通義(四)例解の順を以て進み最後に答案作製の手引として「問題解答要領」を附したる如き其特色の一なり。文體亦頗る平易如何なる人も之を解するに苦むが如きことなし又附録として「五ヶ條の御誓文」「憲法發布勅語」をも解説したれば蓋し文檢用書としては完備に近きものが敢て受檢者諸君の御清讀を乞ふ所以なり。

早稻田大學教授 中島半次郎 序 大久保 龍新著

第三版

生 さんとする 心の叫び

四六版最上製 美本五百餘頁 正價金貳圓 送料十八錢

青年時代の奮勃たる氣魄を大膽に眞率に率直に描き出したるものが本書である。眞實の生活を以て生涯を一貫せん堅く企圖として立ち一日一日を充實の生活を以て貫かんとする一青年の熱情が迸つて發つて其文章をなしてゐる。體證的發展たるその一語一語は犇々と人の心をえぐり或は發奮せしめ或は感泣せしめ或は悲憤せしむる一種獨特の純情に成る。第一の「生」とする心の叫びは綿々として心の内奥に喚び入り第二に「開かんとする當の響き」は啾々として情の錦線にふれ、第三の「夢の如くにして如實の生活」の通ひ路、恩師の死、小使の身の上は一讀思はず泣かじめ、第四の「眞生活の熱叫」の學生論校長論、女子問題等の雄辯は熱狂的の叫びである。一度机の上に運ばれんか蓋し巻をおふ事を忘れるであらう。

大久保 龍新著 (綴方研究者必讀書)

新刊

上手に出來た綴方

袖珍最上製 全壹册三百頁 正價金壹圓廿錢 送料十二錢

綴方は表現的學科として最も力を注がねばならぬ學科である。「文は人なり」とは全人格の發洩が凝つて以て人の心をうごかす文の偉力をいふのである此の書はその目的を究極理想としてゐるのである綴方教授上此の一編を机上に置事は如何に便益が多きかは想像にがたくない兒童も亦多くの小冊子をあさるより此の書一冊を机の上に置んか其の實力はたちまちにして上達するであらう。

東京 神田 大 同 館 發 行

◇永野芳夫氏新著—(世界唯一の研究書です)—

最新刊

デュロウイ哲學說研究

四六判最上製
美本全壹册
金貳圓
送料十八錢

(永野芳夫著) ●デュロウイ教育學說の研究 (正價金貳圓 送料十八錢 姉妹篇)

系統や組織を立てないデュロウイ哲學の全般を知ることは至難である。従つて彼の哲學の系統的的研究は著者の本國アメリカにさへない其の意味でこの書は今の所世界唯一の組織的系統的的研究書であるデュロウイの教育說は地球の全部を包まうとしてゐる。それだけに其教育說の基礎なる哲學說を本當に知り得てゐる人は少ない。本書は概論である故にこれに依つてデュロウイ哲學全般の骨子も知られるデュロウイ思想を眞に知らうとする者は必ず讀みたい。

◇東京帝國大學教授 島地大等(一)氏(一)文學士 朝日融溪氏新著

最新刊

感想一筋の白き道へ

四六判最上製
美本全壹册
金壹圓五拾錢
送料十五錢

親鸞聖人の出現と思想 (五版) 金壹圓八十錢 送料十八錢 姉妹篇

報新新聞 讀書界の傾向は今や宗教的方面へと集中してゐる。この書もその一つである人間の明るき生活輝ける生活といつた様なものを中心として日常生活の迷ひを除き自暴自棄の危難を避け専念に與へられたる一筋の白き道へ進む事を説いたもので宗教思想を説いたものとしては例のなづみ難い佛具がなく背の讀みものとして喜び迎ふべきものである。

東京 神田 大同館發行

『變態心理』主幹 文學士 中村古峽氏新著

第八版

變態心理の研究

—(四六判最上製美本全壹册五百頁 正價金貳圓五拾錢 送料十二錢)—

本書は、變態心理學に造詣深く、且つ催眠實技に於て、殆んど入神の技能を有せる著者が、催眠現象を初め、潜在精神▽二重人格▽幽霊の出現▽狐狸の憑依

我學界隨一の新著

▽透視念寫並に不良少年精神病者の心理等、諸種の變態心理現象を飽くまで、學術

的且つ通俗的に説明したる、我學術界唯一の新著にして、特に世上の山師が、心靈を名として、諸種の瞞著手段を行へることを素破拔きたる一章は、最も痛快を極む。著者は更に、多年の實驗中より、精神治療の實例十數種を詳細に報告し、就中二重人格者の施術法及夢の新實驗等は、全く著者の創意に屬す。教育家、宗教家、醫師、法曹家は勿論、一般家庭の父兄諸氏の必讀を望む。

■稻毛詛風先生新著■ (好評嘖々)

青年教師の歩める道

▲四六判上製美本全壹冊 正價金貳圓 送料金十二錢▼

「教育界の謀反者」として断然教職を放棄し刻苦勵精以て今日に到れる著者が教育者の生活と教育界の現状とを見て感奮措く能ず遂に六箇年に亘れる教師生活の全部を披瀝したるものは本書也。多感にして俊鋭なる青年田舎教師が暗憺たる家庭と荒涼たる社會との間にあつて如何に自己の眞實のために力争苦闘懊惱したるか深刻にして赤裸々たる告白的叙述が如何に從來隠されたる人生の一斷面を闡明したるか有爲なる教育者は勿論苟くも眞實なる生活を求むるものは乞ふ來りて本書を展開せる嚴肅悲痛なる人生の事實を見よ。

東京 神田 表神保町 七
 大 同 館 發 行
 振替 口座 東京 七八二

第六版

教育學術會編著 ■ 四六判最上製美本 正價金 貳圓 郵十二錢
 全壹冊約四百卅頁

忽五版 四書研究

本書は文檢受験者の爲めに、從來の四書研究難を救はんとして著はされたものである。内容 大學・中庸・論語・孟子の各編に就て(一)解題(二)根本思想(三)倫理思想(四)政治思想(五)宗教思想(六)人性に關する思想(七)教育思想(八)其他の思想(九)批評の順に記述し其相互間の系統的闡明に少からず骨を折つた。其他 試験委員の説をも隨時隨所に挿入し且つ儒教の根本思想たる天・天命・性・道・教等の觀念も明かにし置きたれば今如何なる問題が出て来ても決して驚くことはあるまい。文檢受験者は是非熟讀すべきである。其の他 四書の思想的研究は我國に於ても支那に於ても本書が其最初のものであるれば、從來の文字の上の研究に飽きて居る一般の人は本書に依りて儒教思想の鮮味を味ふが宜い敢て受験者・教育者・學校・圖書館並に弘く一般人士に薦むる所以である。

文檢 修身科 國漢科 受験者福音

大 同 館 發 行 圖 書 目 録

大 同 館 發 行 圖 書 目 録

東京帝國大學 文學部教授 文學博士 宇野哲人先生新著

支那哲學史講話

菊判最上製美本
全壹册五百頁
正價金
貳圓五十錢
郵稅拾八錢

第八版

本書は上古より清末に至る支那思想の概要を極めて平易に簡明に叙述して最もよく要領を盡くせるものなり特に清朝に於ける學術思想の變遷が如何に暗々裏に革命を惹起するに至りしか支那の哲學史の如何なる傾向を帶ぶるか著者の最も留意せし所に於て從來世に行はれたる支那哲學史の缺陷は本書に依りて補足せられて亦遺憾なし本書は又附録として一々原文を掲げて直ちに堂奥を窺ふの便に供し亦著者の議論の根據あるを知らしむ要するに本書は初學者にも専門家にも座右に缺くべからざる絶好の新著なり。

教育學術會編纂 (文檢修身科・漢文科受檢者の福音) 最新刊

文 驗 論 語 解 義

四六判最上製美本
約六百餘頁箱入
正價金
貳圓八拾錢
送料十八錢

修身科漢文科の文檢試験には毎年論語から問題が出る問題は字句の解釋と思想の叙述とだがかかる要求に十分應じ得る参考書は從來見當らない本書は此の要望に添はんとするために編纂せられたものである。内容は(一)所題(二)字句講義(三)思想研究の三篇より成り此の思想研究の部には根本思想倫理思想政治思想人性に關する思想教育思想宗教思想其他を闡明した最後に論語思想を現代の思想の上から縱横に批評を試みた文檢修身科・漢文科・教育科受檢者の是非一讀すべき良書である。

●お待兼の姉妹篇出来ました直ぐ御求め下さい!!

岡山縣立師範學校訓導 片岡庫太郎・木山淳一・奥山壽太郎共著

新令準據 第五學年の理科教授

—(四六判最上製美本全壹册六百頁正價金貳圓八拾錢送料十二錢)—
尋四に理科を加へられてから既に二星霜。先に尋四の理科教授に苦しめる實際家は技に再び尋五の理科教授に煩惱を重ねるに至つた本書は著者が多年研鑽の經驗と文部省の新令とに基づきて専心實施研究すること茲に一年その結晶として生れたのである。仍て斯道實際家はこの新しい理科學及改造の教授界を驚動させる理科書たる本書を是非御使用あらんことを希ふ。

桐生高等工業學校教授 島田慶一氏新著 ●(好評激甚) —(好評激甚)—

新 家庭 日常飲食物の智識

四六判最上製
美本全壹册
正價金貳圓

大阪朝日新聞評：食物の性質・滋養價値・料理法等を概説したる上、米、麥、大豆、各種の果實、海藻類、肉類、卵、牛乳、砂糖、茶、酒、醬油を初め其他日常吾人が缺くべからざる食品についてそれ／＼その成分調味、料理方法營養價値までも平易簡明に講述せる書なり。

東京 神田 大 同 館 發 行

早稻田大學文學士 原田實氏新譯

四六判全壹册 最上製美本

金貳圓五拾錢

送料金 十二錢

七版 エレンケイ 女史原著 兒童の世紀

エレンケイ女史の名は今や全く世界的である。女史の至純なる戀愛を高調し高尚眞面目なる結婚を主張するは何の故ぞ！其間に生るゝ兒童を眞の人格者たらしめんが爲である兒童を眞の人格者たらしむるは人類を眞の人類たらしめて幸福と平和と悦びとを此世に齎し生命に輝く世界を創造せんが爲めである。その第一の又最大の準備として女史の主張するものこそ所謂「兒童の世紀」である。内容は兒童中心の思潮を徹底的に説けるものにして佛のルツターの「エミール」に次ぐ大名著と稱せられ實に教育社會のみならず一般の歐米人に甚深の印象を與へ今日の教育を導く一の光明となつて居る。譯者は夙に女史の偉大なる思想と人格とに敬服し多年其著作に親炙するもの其敬仰の熱情遂に技に女史が代表的著作の全譯となる或は涙に濡れ或は力に輝く其の原文を移植し得て餘す所なし我が思想界教育界婦人界は本書を得て一の至寶を加へたりと謂つべし。

早稻田大學講師 本間久雄氏新著

四六判上製 美本全壹册

正價金貳圓

送料金 十一錢

五版 エレンケイ 思想眞髓

エレンケイ女史は最も熱烈に戀愛を高調し戀愛中心の結婚を主張し同時に戀愛のない結婚生活に向ふて最も大膽なる自由離婚を主張した人である。女史は性に對して最も大膽なる舊道徳の破壊者であり最も熱烈なる新道徳の建設者である而してこのエレンケイ女史の思想と人物とを最も平明に最も簡潔に最も味ひ深く書いたものは本書である。

東京市神田區表神保町七
大同館書店發行

◇小林一郎氏新著◇ (佛教を知るべき手引草)

新刊 勝鬘經通解

四六判最上製本 全壹册四百餘頁 正價貳圓參拾錢 送料十二錢

眞の佛教は所謂佛教徒の佛教ではない。活きた世間で人類の生活に大なる光明を與ふるものが眞の佛教である。勝鬘は妙齡の一婦人であるが佛教の眞髓を得て其の夫を初め周囲の人を盡く感化し釋尊は深く之を嘆賞せられた。阿難等の人々に之を普く世に宣傳すべきことを命ぜられた。眞の佛教を知らんとする者は勝鬘經を讀まねばならぬ。聖徳太子が殊に力を用ひて此經を講ぜられたのも道理である。著者は從來の傳統を離れた自由な立場から此經を解釋した。特に餘論二十章には大なる苦心を注いだ。是れなら如何なる人にも分る筈だと信じて居る。意義ある生活を求める人々の一讀を望む。

◇早稻田大學教授 内ヶ崎作三郎序 工藤直太郎氏著◇

新刊 人間文化の出發

四六判最上製本 全壹册四百餘頁 正價金貳圓 送料十二錢

現代の社會的不安と精神的惑亂は十九世紀以來「物」を以て「人間」を支配せんとした唯物文明の所産だ。現代生活の傷しき不信と苦悶とを救ふには「人間」を「物」より解放して、人間愛に生きる社會を創造せねばならない。個々人の生活を買いて最高の統一目的に人間愛を體驗して奉仕することは人間文化唯物の桎梏より靈愛の世界に人間を解放し新らしき人間文化を創造せんとするところに現代人の崇高なる宗教的信念を見る。

發兌

東京市神田區神保町七

大同館書店

◇福田正夫・井上康文氏共著◇

袖珍最上製 金壹圓貳拾錢 送料金 十二錢

拾貳版 童謠・民謠詩の作り方

この書は單なるつくり方ではない。著者が詩壇に於ける永い間の體驗によつて生まれた實際的良書である。北原白秋・西條八十・白鳥省吾・野口雨情諸氏の評論を引用して童謠のつくり方を説明し民謠抒情小曲に至るまで詳細をつくし殊に詩に於ては福田氏が博く深く日本の詩壇全體に亘つて作例をあげて説明す。三木露風・北原白秋・室生犀星・富田粹花・百田宗治諸氏の作の解剖的説明等恰も一大詩篇を讀むが如きである。しかもやさしい親切な詩のつくり方の絶好書である。

福田正夫共 井上康文著

童謠・民謠詩傑作選集全

正價壹圓八十錢 送料十二錢

奈良女子高等師範學校訓導

河野伊三郎著 兒童童謠選集

銀の笛全

正價壹圓五拾錢 送料十二錢

岡山女子師範學校訓導

黒川延平著

童こんこん小雪全

正價壹圓五拾錢 送料十二錢

奥山禱太郎編著

全國傑作童謠一千選全

正價貳圓 送料十二錢

東京市神田區 大館發行所 表神保町七番 座口金貯替振 番貳七八東京

◇稻毛詛風氏新著◇ (教育者隨一の修養書)

新刊 理想の教育者

四六判 最上製 全一冊 五百頁 正價金貳圓 送料十二錢

今古未曾有の改造期に際會して速に解決すべき教育上の重大問題頗る多きを加へたが而も問題中の問題は正しく「教育者問題」であるからである。著者は夙に教育者の優劣に依存するばかりか我が教育者の大半は今や懐疑と懊惱との擡となりつゝあるからである。本書は教育者問題を中心として我が教育者にと共に教育者の生活改造に對して常に切々徳々の情懷を致してゐる。本書は教育者として眞に意義ある生活に生き眞に理想の教育者たらんとする人々は勿論祖國を愛ふる赤誠の士も等しく來つて本書の絶叫する眞理を傾聴すべきである。

◇稻毛詛風氏新著◇ (著者自信ある感想評論集)

再版 感想文化と自然

四六判 最上製 全壹冊 四百頁 金貳圓卅錢 送料十二錢

人本主義文化主義の現代に於て吾々の興味が偏に人生と文化とに傾くのは極めて當然のことである。併しながら人生と文化とは直ちに實在ではない。而も人間の生活は大實在と合つた時にのみ始めて眞に永遠的普遍的なものとなるではないか。本書は斯くの如き見地に立つ著者が文化と自然とに對する觀察批判と感想と追求者に對して新緑の朝の如き清新にして力強き印象を與へるであらう。

東京市神田區 大館發行所 表神保町七番 座口金貯替振 番貳七八東京

◆一條忠衛氏著◆ 四六判最上製美本 全巻册四百頁箱入 正價金貳圓 送料金十二錢◆

新刊 人格主義の社會觀

倫理學說として永らく現代生活を指導して居た自我實現論は遂に個人的自我實現說と社會的的自我實現說とに分岐するに至つて弊害を生じたが、これを新しい見地から調和しては新しい指導の任に當らうとして居る倫理學說は人格主義である。人格主義は哲學界の文化主義と呼應して道徳界に於ける唯一最高の原理である。本書は人格主義の倫理學から現代の社會生活を觀察してその重大なる問題に就いて倫理的批判を試み人生の目的と手段とを理論と實際との兩方面から指示し人格實現の至善的社會を論述せる書也。

◆稻毛詛風氏著◆ 菊判最上製 正價金四圓八拾錢 送料金廿四錢◆

新刊 創造本位の教育觀

本書は創造主義者たる著者が創造を原理として教育のあらゆる問題を闡明せる著者獨得の教育觀也。著者の透徹せる思索と明快なる論斷とが如何に教育の難問を解決し如何に教育思想に深みを與へたるか淺薄にして陳腐なる舊教育論舊教育學現に倦らざる士は本書に於て初めてオアシスを見出し標榜にして杜撰なる新教育論新教育學說に安んぜざる士は本書に於て初めて安立地に達するや必せり。教育に生きんとする士は讀め。

發兌 東京神田區長神保町七 大同館書店

版八
ベルグソンと現代思潮
文學博士波多野精一序 野村隈畔著(四六判最上製美本 金貳圓五拾錢 送料金十八錢)
早稻田大學教授内ヶ崎作三郎序

版七
オイケン 人生の意義と價值
松山高等學校教授 三並良譯著(菊判最上製 美本金壹册 金貳圓五拾錢 送料金十八錢)

舊世界觀は倒たりと雖も新世界觀は未だ確立せず、思想界は紛亂し人間はその歸趣に迷はんとす。是れ實に現代の眞悶にして精神界一切の病源なり。オイケン博士が獨特の見地より此大問題の解決を試みたるものを本書とす。由來博士の所説は難解なりとの評ありと雖も本書の如きは決して然らず、博士も亦常に本書を最も平易の叙述と稱せり。そして博士と親交ある譯者が最新第五版によれる譯筆も亦た平明流暢なり。オイケン哲學の眞髓を知り人生問題を解かんとする者は之を讀みざるを得ず。

東京神田區長神保町七 大同館發行

◇京都帝國大學文學部教授文學博士 三浦周行 序
 ◇京都帝國大學文學部助教授文學士 本庄榮次郎 文
 坂上信夫 新著

新刊 土地爭奪史論

土を負うて土に反り行く者の土の上に畫ける生活の歴史である。國史三千年の推移を辿つて吾等の祖先が如何なる生活の姿を其上に遺したであらうか。土地制度の歴史を説く間に、人間性の歸趨を靜觀して其姿を凝視しつゝ、自分の腕に火をつけてその燃ゆる腕を捧げて叫ぶに非れば吾世の闇は露れぬであらう」といふ結論に導いて行く。深い思索と豊かな情操と燃ゆるが如き火の文字を此一巻の處女作に教めて著者は之を江湖の有識者に捧げ其示教を俟つといふのである。

四六版最上製
 美本全壹册
 正價金貳圓
 送料十八錢

◇新井白石氏遺著◇ (國史研究者唯一の參考書)

五版 讀史餘論

白石の讀史餘論の價値は今更論ずるの要なし本書は主として白石の外孫藤清盈の謄寫本に據り其他諸種の異本を參照して増補せるものなれば從來世に現れたるもの、中で最も信頼するに足るべし。そして原本の註語のほか新に校訂者が補語を附し以て異説を擧げ且つ註釋を施して研究者の便を計れる分は多とすべし且つ一々讀み假名を附し卷末に索引を添へたり。 (内外教育評論評)

四六版最上製
 美本全壹册
 正價金貳圓
 送料十八錢

東京市神田區 大館發行所
 表神保町七番地
 振替貯金口座
 東京八七二番

大 同 館 發 行 圖 書 目 録

□三浦修吾先生新著□ 四六判最上製美本全壹册箱入
 正價金貳圓 郵稅十二錢

教育者の思想と生活

著者は教育者として十幾年の苦しい生涯を送つて來た。肉體にも智識にも多くの缺點を有つてゐた著者は導かれる方へ進まんが爲め眞摯に考へ純粹に感じ強暗い悩み、教育者としての慰めと力とを得んとする士は讀め
 驗の上に家庭生活の上にとれ丈夫著者が苦惱して來たか、其事が何等かの暗示を有つものであり得たら著者の幸は之に過ぎない。

一教育者の思想……思想と生活……自立論……教育と宗教……人と事業……人と職業……徹底と眞實……教育者の資格……教育者としての努力……教ふる人學ふ人……天職……精神生活と云ふこと……生きる爲の思想……労働と智識……師弟の情誼……眞實の心……自發的精神……二教育者の體感……好き嫌ひ……最も警戒を要する時……若葉の榮ゆる頃……俯仰天地……獨居……或る若き教師……汝の運命を喜べ……三學校教師と生活……教育者と學校教師學校教師と經濟生活……

●● デューウィー研究の權威 ●●

◇ 永野芳夫先生新著

◇ 四六判最上製 美本四百餘頁 正價金貳圓

送料十二錢

デューウィー教育學說の研究

第六版

五年以前から製頭的にデューウィーを研究してゐた著者が全ての著書論文を讀破した後ち哲學を背景としながら教育思想を系統づけたその全般的研究の成稿を澤柳博士長田高師教授の二つの推賞のまゝに公にする事になつたのである。行詰つた今日の教育と教育學に不満を持つものはデューウィーに來れ!! 在來の紹介や翻譯を讀んで未だ釋然悟徹しなかつたものは本書を讀め。

目次

序論哲學的背景：哲學の進歩：第一章教育とは何か：生活としての經驗：廣義の教育：第二章學校教育とは何か：狹義の教育：第三章在來の諸教育說の批判：準備主義の教育：開發主義の教育：第四章教育に於ける目的：第五章方法論：第六章題材論：遊戯及作業：地理及歴史：科學：第七章興味そのほか。

◇ 小林一郎氏新著 ◇ (著者が敬仰の熱情遂に本書を成す)

第四版

芭蕉翁の一生

四六判最上製美本
全壹冊約六百頁
正價圓八拾錢
送料十八錢

其の生前に於ても死後に於ても芭蕉翁の如くに多くの崇拜者をもつて居る人は今古の詩人文士中に會て例の無いことである此の如き人の一生は何人も之を研究して見て大なる教訓を得べきである著者は俳諧の専門家では無いが翁の作を愛誦すること既に三十年翁を讀る上に於ては一種の自信をもつて居る隨て著者は此書を現代の各階級の人に薦めて其の批判を得ることを懇望して居るのである。

◇ 小林一郎氏新著 ◇ (現代青年必讀の修養書)

再版

自由の生活

四六判最上美本
全壹冊約六百頁
正價圓五拾錢
送料十八錢

思想界の混亂は實に未曾有である。吾等は此間に處して如何に吾等の活路を開いて行くべきであるか。今は徒に樂觀するを許さぬ又徒に悲觀すべきで無い。之を過去の經過に徴し現今の情勢に照して今後の立場を確と定めなければならぬ著者は此の見地から日本の文明の過去及現在に對して自由なる批評を試みた。現代に處して意義ある生活を爲さんとする人々の一讀をすゝめる殊に青年の人々と青年指導の任にある人々は必ず精讀すべきである。

發兌

東京市神田
表神保町七

大同館書店

◇井上庄三氏新譯◇ (四六判最上製) 正價金貳圓 送料十二錢

新版 性と自我

(若き婦人の爲に)

〔米國婦人社會で大歡迎を受けた書〕 若き婦人の種々な疑問解決し難い煩悶を懐き乍ら打明けめに遂に其本性を誤つて如何しい道に迷ひ込み不道徳に生きて行く事は少なからずある事です、原書は實に斯かる婦人の相談相手として過を未然に防ぐ爲めに生れたものです、我が國の若い婦人達も此書に依つて大に啓蒙される事と思ひますし世の父母の参考にもならうかと存じて翻譯して出すことに成りました。(著者)

◇一條忠衛氏新著◇ (四六判最上製) 金壹圓八拾錢 送料十二錢

再版 男女の性より觀たる社會問題

〔時事新報批評〕 性?ア、またあれかと早合點しては不可なり兩性の差別に立脚して近時の社會問題に對する根本より研究して社會問題解決の新しい方法を見出さうとする目的で書かれたものである附録の古典に現はれたる男女の道徳觀は原典の本文を引いて直接に味讀せしむる方法で戀じの解説よりも遙に優れた試みである

發兌 東京市神田區 表神保町七 大同館書店

萩・薄・蟲摩・曠野・月光、秋の武藏野は給の如く詩の如し、武藏野を知り、武藏野を愛し、武藏野を惹しむに於て著者は現代の第一人者である、巡禮探勝實に數年委に武藏野の自然を見、人を見兼て其處に生起する土地、河川都市・田園等の各社會問題を考察す文や清新豊麗一種獨特の新藝術品を完成し在來紀行文の舊型を打破し別に史實に一新生面を拓く外實地踏査の記録として自ら高級案内記をなしてゐる、武藏野及郊外を知らんとする人は必ず本書を讀んで此熱烈眞摯なる美玉の如き新抒情詩を愛誦せられよ。

◇白石實三氏新著◇ (發兌) 東京市神田 表神保町七 大同館書店

三版 増訂武藏野巡禮

四六判最上製美本 全壹册五百餘頁 正價金貳圓五拾錢 送料十八錢

目次

武藏野巡禮……クニノミヤツコ……原始的な生活……府中及國分寺……元弘の斷碑……古武士の足跡……野火止塚……行路樹……堀桑の井……武藏野の古驛……愛と美と命……薄の武藏野……院橋ガスタック……奥澤の佛像……落葉林の美……雑木林……野の銀杏……田無町……櫻可ヶ谷墓地……病院……木下川薬師……東武藏野の瞥見……新荒川……葛西族の跡……野新田の渡頭……夕顔觀音……野の望樓……野をめぐる山々……新幡の模型富士……多摩川の俯瞰……狭山の丘の族……高麗王の碑……西武藏野……鎌倉街道……多摩川の渡頭……武藏野の花と新緑……舊神田上水……小金井の花……雨の中の井頭池……深大寺の百日紅……目黒五百羅漢……法華寺の廢趾……江戸川の古驛……武藏野の夜を行く……車上の一夜……川越街道……高原の異國人郷……栗橋の水鏡……加波山の鐘……埼玉の野の町……越邊川の合營……筑波へ……國分寺の合營……北武藏の町々……武藏野の古戰場……野の斷崖……悲しき若葉の武藏野……明治神宮の社……(寫眞版十餘葉地圖入り)

大阪毎日評……武藏野の自然と人生との織り成した美しい風趣情懷を寫して甚だ面白し。 國民新聞評……武藏野を詠じた散文詩とも見るべき紀行文隨筆として立派な美しい文章である。

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

大 同 館 發 行 圖 書 目 錄

要 大 次 目 容 内

第一章 教育思潮の推移
 第二章 教育思潮の推移
 第三章 教育思潮の推移
 第四章 教育思潮の推移
 第五章 教育思潮の推移
 第六章 教育思潮の推移
 第七章 教育思潮の推移
 第八章 教育思潮の推移
 第九章 教育思潮の推移
 第十章 教育思潮の推移
 第十一章 教育思潮の推移
 第十二章 教育思潮の推移
 第十三章 教育思潮の推移
 第十四章 教育思潮の推移
 第十五章 教育思潮の推移
 第十六章 教育思潮の推移
 第十七章 教育思潮の推移
 第十八章 教育思潮の推移
 第十九章 教育思潮の推移
 第二十章 教育思潮の推移

文 檢 受 驗 者
 の 最 大 福 音

本書は、最近教育の學說並に思想を本質的に叙述し之を深刻に論じ徹底的に批判したるものにして第一章第二章は教育思潮の推移を論じ、第三章は教育思潮の推移を論じ、第四章は教育思潮の推移を論じ、第五章は教育思潮の推移を論じ、第六章は教育思潮の推移を論じ、第七章は教育思潮の推移を論じ、第八章は教育思潮の推移を論じ、第九章は教育思潮の推移を論じ、第十章は教育思潮の推移を論じ、第十一章は教育思潮の推移を論じ、第十二章は教育思潮の推移を論じ、第十三章は教育思潮の推移を論じ、第十四章は教育思潮の推移を論じ、第十五章は教育思潮の推移を論じ、第十六章は教育思潮の推移を論じ、第十七章は教育思潮の推移を論じ、第十八章は教育思潮の推移を論じ、第十九章は教育思潮の推移を論じ、第二十章は教育思潮の推移を論じ

最 近 教 育 學 說 的 叙 述 及 批 判

慶應義塾大學教授 稻垣末松 先生 修補 渡部政盛 先生 新著

〔現今教育主潮・副潮・細潮の最も完全なる縮圖〕 第七版

文學博士 尾上柴舟 氏 尾上登良子女史新著 (系圖年表を附す)

四六版最上製
 美本五百餘頁
 正金貳圓五拾錢
 送料十八錢

類 書 中 の 白 眉
 文 檢 受 驗 者 必 讀 書

國語の至寶と稱へられながらも其の文の古めかしくて語の喚り難きより讀み味ふに甚だ骨の折るゝ爲に世に敬遠されたるは光源氏の物語なり此の書は源氏の意を細かに噛みくだき俗に直して新しく現代の讀者の頭腦に容易に消化せしむる故に工夫したるもの大意とは云へ文情調勢語氣などもなるべく原本の儘を傳へんと苦心したるものなれば語中の男女の面影も勢揃せしめて人物情景の活動等原本を讀むに異ならず源氏物語の縮約として最も成功したるものなり。巻頭に挿入したる系圖並に年表は單に本書の参照として趣味あるのみならず一般源氏を讀むものにも亦當事の事蹟を知る爲めにも極めて有益なるものなり。

新 刊 國 語 中 の 梵 語 の 研 究

國語中の外來語は相當に澤山あるが特に著しきものは梵語である之れを教へたら澤山ある而かもこの多數の梵語が殆んど國語に同化して仕舞て一般國民は夢にも天竺より舶來せしものと氣附ずには日常平氣で使用して居る今其の内文學的乃至歴史的に興味あるもの三十語を選び讀者の讀物として提供したるものである 大谷光瑞師の批評は前人未發のものです (著者)

東 京 神 田 大 同 館 發 行

袖 珍 洋 製 本
 全 五 拾 錢
 送 料 八 錢

渡部政盛先生新著 菊判最上製表本 全壹冊五百餘頁 參圓八拾錢 送料金廿四錢

日本教育學說の研究

我が國の教育學は今や全く行詰て仕舞つた。吾人は之を打開せねばならない。本書は斯くの如き貴き使命を帯びて公にされたものである。内容は諸論：第一章明治前半期の教育學說：第二章日本輓近の教育學說：第三章個人的教育學說(谷本)第四章社會的教育學說(熊谷、樋口、吉田、田中、野田)：第五章調和的教育學說(大瀨、森岡、小西清淵)：第六章生活完成の教育學說(下田)：第七章文化的教育學說(乙竹)：第八章人格的教育學說(中島)：第九章實際的教育學說(澤柳)：第十章自勵的教育學說(河野)：第十一章公民的教育學說(川本)：第十二章創造本位の教育學說(稻毛)：第十三章分團的教育學說(及川)：結論：の諸章より成つてゐる。特色は諸家の學說の詳叙と忌憚なき批判とにあるは言ふまでもない。隨て學者先づ本書を讀むの義務があり。教育學者文檢受験者は本書に依つて學者の說の要點と長短とを知る必要がある敢て弊館の大言以て江湖に本書を推薦する所以である。

文檢受験者の最大福音

323

468

終